



ただの幼馴染で悪友で
親友の妻だと思っていた女と
ただれた関係になる話

U-Non
(ユーノン)

ドアを開けると、見慣れた顔があった。
いや、見飽きたといってもよい顔が。



よろ
来てやったぜ

今日はもてなせよな

うるせん、お前相手に
もてなしたなんてもったいない

俺は言い返す。



んだとこのやろ〜！

はっはっは！

悪態を言いながらカラカラと笑う。
昔から変わっていかない。

こいつとは小学生からの腐れ縁、悪友である。

昔から気が合い、家が近くにあったこともあり、よく遊んだものだ。



今でも付き合いがあり、
男女の壁を超えた友情を感じているのだが……。
相変わらず、サバサバした奴だ。
がサツといってもよい。

数年前に結婚してから落ち着くかと思いきや、
特に性格は変わらなかった。

左手の薬指をふと見る。

さいつは同じく
小学校からの幼馴染の信也と結婚したのだ。



信也は気弱なところはあるが、
優しい奴で、いつとは正反対だ。

性格が中和されて丸くなるかと思いきや、結果は見ての通りだ。

と、キーンで俺は気付く。

あれ？信也のやつは
一緒にやないのか？



あら、あいつ急に夜勤が入っちまってな。

急遽これなくなっちった

おいおい、それくらい事前に伝えてくれよ、料理の量とが色々あるんだからさ。

今日は3人で俺の家で飲み明かす約束をしていたのだ。

1人分余分に食べ物が余ってしまう。

俺の文句に悪友は

すま〜！

と、なぜか笑いながら一言謝った後、

ま〜いいじゃないか！

私とお前であいつの分まで
食えばいいだろう！

。。。などのたまっている。

自分で連絡忘れをいって、
これである。



まあ確かに小食の信せに
合わせてるから食べられるだろうが……。

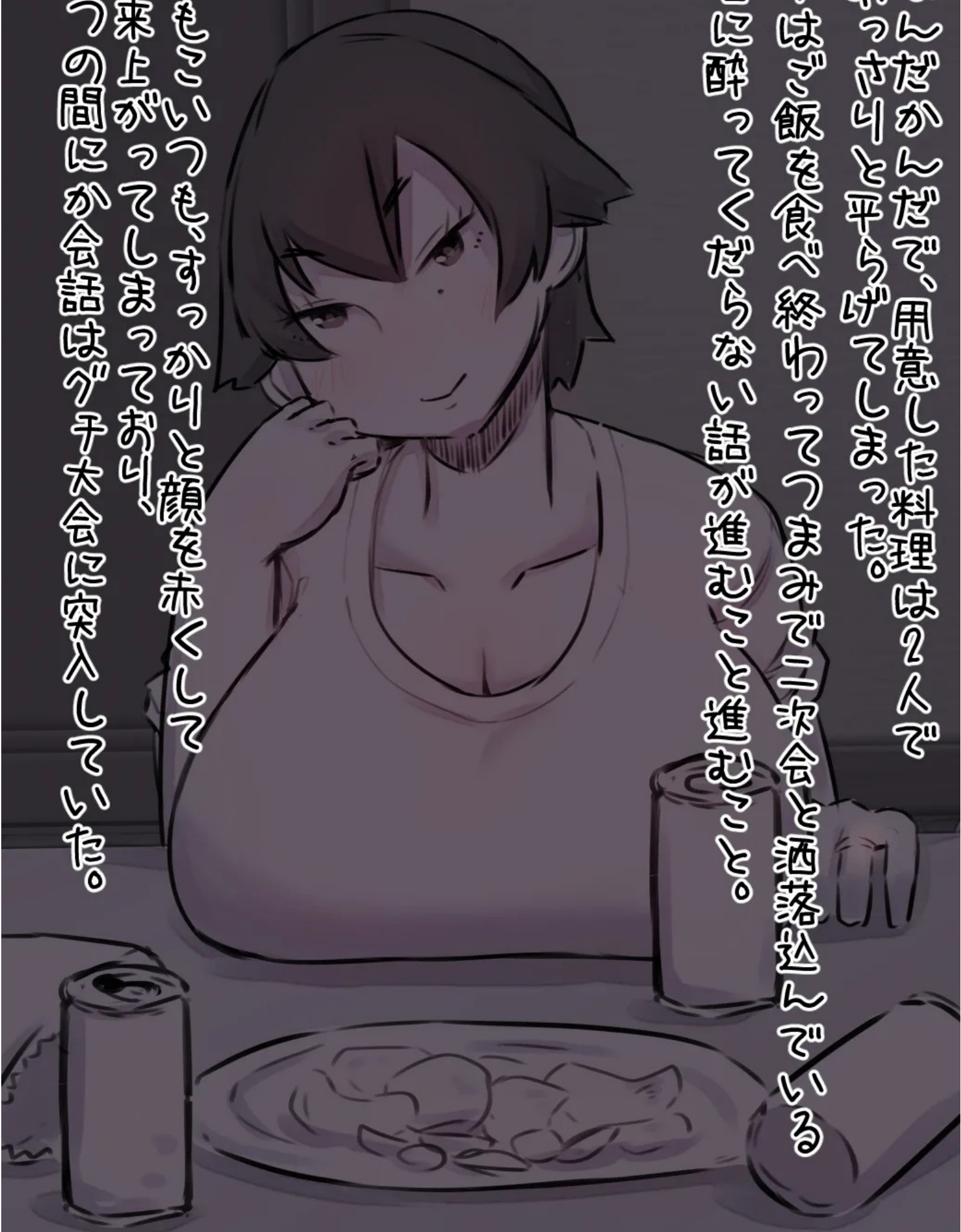
面倒くさいので
それ以上何も言わずに、家に招いた。



なんだからだで、用意した料理は2人で
あっさりとお平らげてしまった。

今はご飯を食べ終わってつまみで二次会と洒落込んで
酒に酔ってくだらない話が進むと進むと。

俺もさいつもすっかりと顔を赤くして
出来上がってしまったおれ、
いつの間にか会話はグチ大会に突入していた。



でさく、最近信也のやつは
夜のお相手
してくれないんだよねえ

などという、唐突なカミングアウトに

やめろや〜!!

知り合いのきんな話
想像したくないわ〜!!

ど、言うしかなかった。



急にシモの話を持ってきて、相変わらずガサツな奴だ。
実際、知り合いの「キウイウ」ことなんぞ
色々と普段のイメージが崩れるので考えたくない。
だがしかし……

視線を下げると、大きな胸が
どかんとテーブルに乗っかっている。

ふだんは意識していないが、やはりでかい。



こいつが急にシモの話振るからか、ふと妄想してしまった。

こいつはセックスの時、どのように乱れるのだろうか？

この巨大な胸を揺らしながら、どんな乱れた顔をして…



思えば俺らが高校の後半くらいから、
急にこいつの胸が大きくなったという記憶がある。

信也とこいつが付き合いだしたのはそのころだったか。

あのころから、こいつらはやってきたのだろうか？

信也はこいつの胸を揉みしだきながら
思い切りちんこを出し入れして…

勝手に想像して、何とも言えない、複雑な気分になる。



あ、確かに、一緒に風呂に入ったときとか
ちらっと見えただけど

……ってかきゆうってかこなって



でも今私はお預けを食らっているのだった！

この自慢のポテターが疼くわ〜

ゆきりん

むにい

と言いながら、胸を強調してくる。
テーブルの上のバスケットがゆきりんと揺れる。



胸の谷間から熱気がむわっと
上がった気がした。

見知った悪友の、知らない性的な仕草に、
俺は生唾を鳴らしきうになり……我に返る。

むわっ

……いつ相手に？

ダメだ、俺も……いつも
飲みすぎているようだ。



あ、お前すげえ
ちんこでかいらしいじゃん！

信也に聞いたぞ！

と、唐突に億弁もなく言い放ち、
さっきまで考えていた邪な気持ち
一発で振り払われた。

彼女もいないだろうし

宙の持ち腐れだな！

と、更に追い打ちをかけてきやがる。



・・・お前、本当にガッツだな

と、俺は言い返すしかなかった。

ははははー！

こいつはどのみでも朗らかに
笑い続けていた。



ふと、また俺は視線を胸に向けてしまった。

「ははは」とこいつが笑ったびに、
テーブルの上の胸が
ゆさゆさと揺れている。

すぐに手が届くとこいつに
柔らかかきうな乳房が。

また生唾を鳴らしきうに
なってしまった。



お？

お？

私のおっぱい
見てるぅ？？

ムラムラするのぉ？

触るぅ？

うりうりー！

まずい、視線に
気づかれたようだ。
殴りたくなる
ような顔をしながら胸を
強調してくる。

からかっていぢがる。。。。



うわらめちやくちやくに
揉みしだきたらしい

と棒読みで返しつつ、視線を顔に戻す。

彼女の顔は酒で赤らめ、
完全に出来上がって
いるように見えた。

心なしか、息を荒くして
いる……？
気のせいだよな……？



こいつ相手に少しでも
ムラムラムしてしまっただけに
敗北感を感じつつ、

話題を変えながら
酒の席は進んでいった。





数十分後……



こいつは酔い疲れて、人のベッドでござり寝転がってしまった。
こういうことは初めてではない。
ただし、きういふ時は信せも一緒だったが。

しかし、変な話をしたからか、はっきから体の熱さが収まらない。
具体的に言うと股間が熱い。

油断すると股間がギンギンになりきうな衝動を必死で我慢していた。

今まで「女」として意識していなかったっていう、
たまたまなく「女」として見てしまっている自分がいる。

はっきんぐんぐんといつと変な話をしてしまったせいだ。

急に信也とのセックスの話をしだしたり、
自分の乳をこれみよがしに強調したり……。

ん……

わけとかか？誘っているのか？
と、勘ぐってしまう。

改めて、寝かせるこのいつを見下ろす。

見た目通り、柔らかかきうで、大きな胸、
服からちらりと見える少し肉が乗ったお腹、
肉感がありきうな太もも。

んん♡

んん♡

んん♡

んん♡のすべつてがいからしく見えてしまう...
んん♡まで考えて我に返り、いかんかんと頭をリセットする。

さて、酔いつぶれたっいつはどうするか。

信也にでも連絡して引き取りに来てもらうか。
というかあいつは夜勤中だけか、などと考えていると、

ねえ

とか細くも艶っぽい声が聞くと、どきりとした。

寝ていたと思っていたのだが、どうやら起きていたようだ。



信也に、今日はソファに泊まっつていくと伝えて…

って泊まる気がよー仕方ねえな

突然の「泊まる宣言」に少し動揺するが、悪態をついてぐっまかした。

泊まらせること自体は初めてではない、その時は信也も一緒だが。流石にベッドはいつに貸して、俺はソファで寝るとするか。

夜風にあたるため、
ペラングダに出てから
信也のスマホ木に連絡をした。

夜勤中とのパコのだが、電話に出てくれた。

信也は申し訳なせやうな声で
「迷惑かけて本当にごめん。
よろしく頼むよ」
と返してくる。
相変わらず良い奴だ。

今度は3人で飲む約束をしつつ、
電話を切った。

今日の俺の寝床はどうしようかと考えつつ
ペラッダから戻った。



キムには...

あられもない、悪友の姿があった。



悪友は静かに吐息を漏らしながら、
こっちらを薄目でじっと見つめていた。

ジーンズを下ろし、
真っ白いショーツを露わにしながら、
本人は何も言わない。
ただ見せつけるままだった。

むわっ



俺は、激しく興奮していた。

見知っているはずの悪友が、
うっすらと汗をにじませて
いやらしい匂いを漂わせている。

期待に満ちた視線で、
何かを待っていた。

むわっ

むわっ

むわっ

ふ〜…

ふ〜…

俺は悪友のその姿に
ズボンをパンパンに膨らませ、
興奮して激しく息を吐き出していた。

はっ
はっ
はっ

はっ
っ

はっ
っ



ねん

して…

お願い…

ふっ

ふっ

ふっ

悪友は吐息を漏らしながら、静かにおねだりする。



俺は何も言わず、
息を荒げながらズボンを下ろし、
性器を露出させる。

♡

ふっ
ふっ
ふっ
ふっ

ぽるん

ふっ
ふっ
ふっ
ふっ

ふっ
ふっ
ふっ
ふっ

屹立したやれを見て、彼女の目が変わる。

むわあ……

興奮した、期待に満ちた目をして、俺の屹立した性器をじっと見つめていた。



もはや俺は、っっっいつを友達として
見る事ができなかつた。

ただ一匹のメスとして認識して、
すぐにでもっっっいつの穴にぶち込みたい。

っっっいつも、今すぐ交尾したいという、
淫狼な目でっっっちらを見つめていた。

ふっっ！

ふっっ！



白いシヨーツを強引にずらすと、
人妻とは思えない、綺麗な性器が丸出しになり、
むわっとした熱気と、尿の匂いを感じた。

ふっ
ふっ
ふっ

普段のふっというのガッツな顔を思い出し、
そのギャップに興奮を覚え、更に息を荒げってしまった。

むわあ♡

はっっ！

はっっ！

俺は頭を真っ白に塗りつぶし、
一匹のメスに思いっきり挿入した。

あ

あ……？

びん

びん

ちんちん……♡

ちんちんちんちん♡

びん

俺のちんちんは「ずぶずぶ」と抵抗されることなく
メス穴に入り込んでいった。

はあっ♡

ちんちん♡

ちんちん♡



ちんこが膣内にすっぽりと収まり、俺はあまりの興奮と気持ちよさに、息を荒げる

あゝ♡

お♡

お♡

おほお♡

何より、人妻であり、悪友の…とセックスしているという状況に背徳的な興奮を覚えていた。

はああ…

みち♡

みち♡

みち♡

あ…

あ…



だが、俺に貫かれているっていうのは、俺以上に興奮し、よがり狂っていた。

お♡

なにこれ♡

奥、まで♡

お♡

くっくっくっ♡

初めて奥まで貫かれる、本当のメスの快感を味わい、嬉しきうにびくびくと震えている。

みち♡
みち♡
みち♡
みち♡

お♡

ねえ♡

動かしこめ♡

ちこい♡

んん

あ♡

んん

んん

お♡

めめちちちちちちちち♡

快感を我慢しながら、絞り出すように懇願してきた。



その懇願する声で、俺の頭は真っ白になった。
遠慮せずに、獣のように出し入れを繰り返す。

ほぉおぉお♡

ほぉおぉっ♡

お♡

こぉお♡

ぶるんっ

ぶるんっ

ぽんぽん

ぽんぽん

ぽんぽん

ぽんぽん

ぽんぽん

ぽんぽん

下にいるメスは嫌がるやぶりも、
痛やうなやぶりもなく、メス声をあげている。

あの幼馴染が、獣じみた声を上げて
だらしない顔をして思い切り喘いでいた。

ま♡待ってん♡
ま♡待ってん♡

お♡お♡お♡お♡

知ら♡しらない♡
ここのなの♡しらない♡

出し入れするたびに強烈な締め付けと
快感が俺を襲い、気持ちよけに声を上げてしまう

す♡ち♡ち♡

す♡ち♡ち♡
す♡ち♡ち♡

ふー！

う♡ち♡ち♡

は♡ち♡ち♡

き♡ぎ♡ち♡ち♡

す♡ち♡ち♡
す♡ち♡ち♡



ぶるぶると、服に包まれた大きなバストが
いやらしく揺れ動く。
ブラジャーをしているため、激しく揺れてはいない。

あ
あ
♡

届いてるよお♡
奥までん♡あ♡

は♡初めてん
お♡あああ♡
すげーいよおおお♡

あの乳房を思い切りもみしだきたい
衝動に駆られつつ、今は出し入れに集中する。

ぶるんっ

ぶるんっ

ぶるんっ

ぶるんっ

ずちちっ

ずちちっ

ずちちっ

ずちちっ

ずちちっ

はっ

はっ

段々とメス声が甲高く、より獣じみてきた。
もう絶頂が近いことが見て取れる。

あ♡あ♡あ♡あ♡

だめえ♡

はっ

はっ

はっ

あ♡あ♡あ♡あ♡
い♡く♡う♡♡
い♡ち♡ち♡う♡よ♡あ♡あ♡あ♡

ここまで乱れてくれたのといっ
悦びを思いつつ、俺は「いつを
思い切りイカせるため、思い切り奥に突き刺した！」

はああ...

どちゅっ

どちゅっ

どちゅっ

どちゅっ

ふううう!!

イケ!!
イケ!!

ずん、と思いきり切り子宮失まで
突き刺した瞬間、こいつは
絶頂を迎えた。

ふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふ

びん、びん、

いっころふふふふふふ
いっころふふふふふふ

♡♡ふふふふふふふふ♡♡

びん、

部屋に響き渡る絶頂の喘ぎ声が、
こいつの満足感を表していた。

びん、

ずんっ

だらしない顔をさらしながら、
びくびくと痙攣する悪友は
知らない顔をしていた。

うおおおおお

おおおおお

おお

おお

がが

がが

がが

がが

ちゅちゅちゅ

いったばかりの腔穴はぎちぎちと
俺のちんこを締め付け、離す気配がない。



絶頂をキめながら、
更におねだりするような、
期待するような目で俺を見ていた。

あふ♡
ふう♡

♡♡
♡♡

まだ全然し足りないという目だ。
俺もまだイっていな。ちんこはギンギン猛っている。
俺は声を荒げながら、続ける決心をした。

ふう〜…

ふう〜…

ふう〜!



ほお♡

お♡

お♡

は♡

は♡

は♡

は♡

は♡

俺は性器を繋げたまま、
強引に上着をめくりあげた。

あ……♡

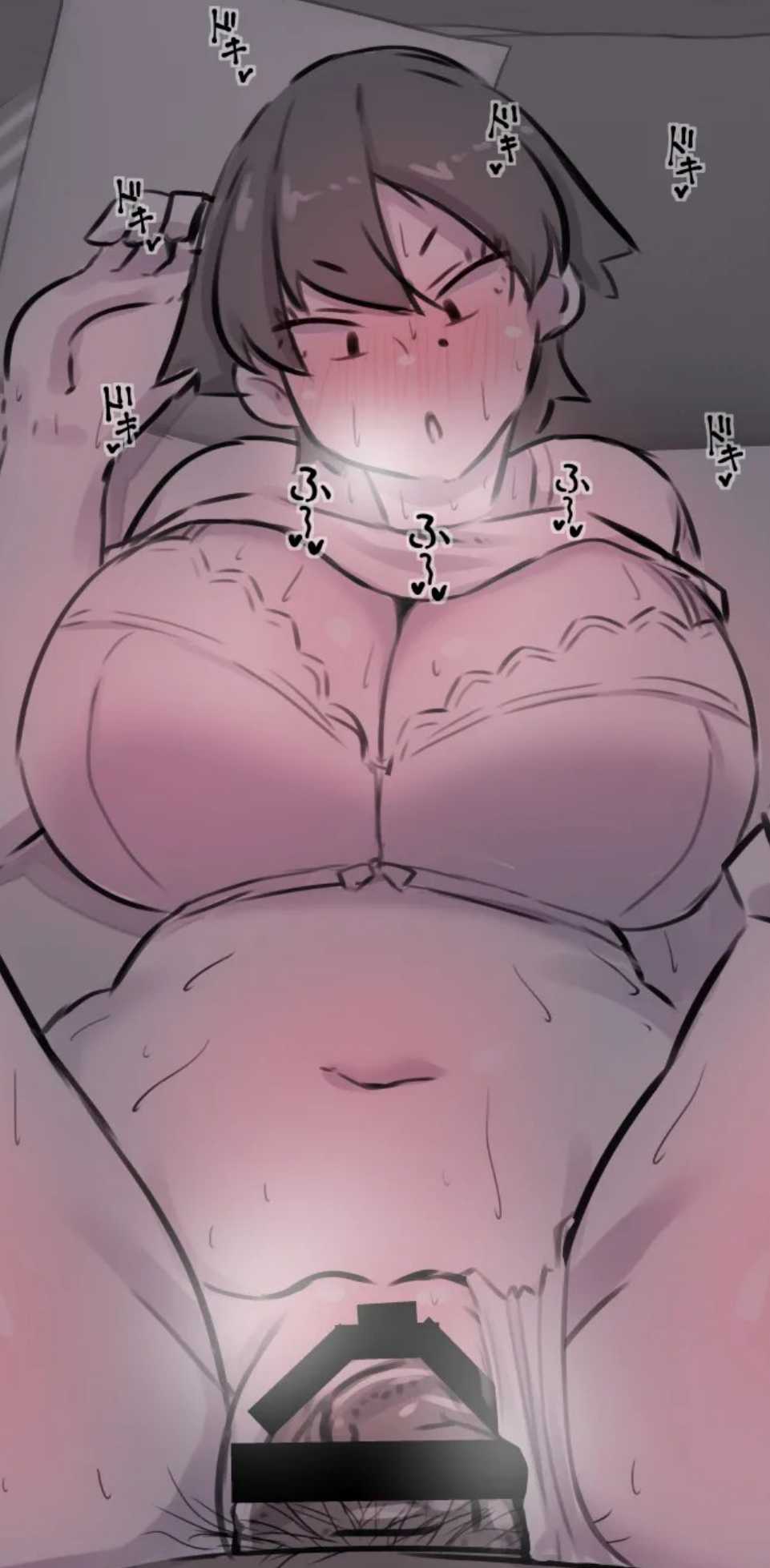
ゆびさしゅ

ショーツと同じ、白いブラジャーに包まれた、
巨大な胸が顔を出した。



先ほどから悪友は、嫌がるやぶりも見せず、
ただなすがままにされている。

やれどころか、これからすぐに次のセックスが
始まると期待し、息を荒げ始めた。



悪友の全身から、
甘く、淫らな匂いが漂っていた。

そしてその顔は期待に満ちていた。
強引に、めっちゃくちゃに犯されることを。

むわっ

むわっ



俺は、今日の前にある、
いやらしく実っている
乳房にゆっくりと手を伸ばし

あ……♡

あ……♡

ドキ

ドキ

ドキ

ふっ

ふっ

ドキ

ドキ



強引にブラジジャーをずらし、
握りつぶす勢いで、
乳房を思い切り
わしづかみにした。

ひゅっ♡
ひゅっ♡
♡♡♡

は〜♡
は〜♡

ふぁぁぁ♡
あぁぁ♡

瞬間、悪友は顔を
仰け反らせながら、
歓喜の声を上げた。

ぎゅっ♡
むっ♡
うっ♡



握る力を強め、
乳首をぐりぐりとしてみるよ。
更に声のトーンが
上がっていった。

ん♡ん♡ん♡
ん♡ん♡ん♡

お♡
お♡
お♡
お♡
ち♡ち♡ち♡
ち♡ち♡ち♡
は♡れ♡る♡
は♡れ♡る♡
は♡れ♡る♡

痛がっている声に
隠せもできない
悦びのトーンが混じっていた



乳房を強引に揉みしだきながら、同時に膣穴の出し入れを開始した。

お♡んおお♡
おおお♡おお♡

ん♡ん♡ん♡ん♡
ん♡ん♡ん♡ん♡

ん♡ん♡ん♡ん♡
ん♡ん♡ん♡ん♡

悪友は胸と膣穴両方同時に攻められ、もう取り繕うこともできずに下品な喘ぎ声を上げ始めた。

ギョギョ

ギョギョ

ギョギョ

ぽろぽろ

ぽろぽろ

ぽろぽろ

ぽろぽろ

ぽろぽろ

ぽろぽろ

俺は容赦なく攻め続けた。
形が変わるほど
胸を揉みしだき
乳首をギリギリとひねる。

あ♡あ♡
ふわあ♡あ♡
あ♡あ♡あ♡

しゅ♡しゅ♡
しゅ♡しゅ♡

もっ♡
もっ♡
もっ♡

こいつも、それを望んでいた。
攻める度に悪友の嬉しきような
喘ぎ声が部屋中に響く。

ガク

ガク

ガク

ギョウギョウ

ギョウギョウ

ゴウゴウ

ゴウゴウ

♡
♡
♡

♡
♡
♡

♡
♡
♡

こいつの膣の締め付け、
胸をもみほぐす感触、喘ぎ声、
すべてが俺に快楽を
伝えてくる。

俺も我慢できず、
声を抑えきれなかった。

あ♡あふう♡

お♡

お♡
えんえん

イク♡イク♡
またイクううう♡
何度もおおお♡
イってるよおお♡

何度も出し入れした
ちんこはもう耐えられず、
射精寸前になっていった。

むにい

びん

びん

むにい

むにい

ずちゅ

ずちゅ

ずちゅ

ずちゅ

お♡

おおおおお♡

ふおおおお♡

腔内に出してしまいう前に
引き抜こうと思った矢先

いっ♡いっ♡いっ♡いっ♡いっ♡いっ♡

中に出して
いいよお♡

く♡く♡すり♡い♡
飲んでる
からあ♡

出してん♡
好きなだけ私の中にい♡

私の中をお♡
いっ♡ぱい♡に
してん♡え♡い♡♡



その甘えるような
おねだりに、俺の意識は
真っ白になった。

はふ♡はふうう♡

あふう♡

あおあお♡
あおあお♡
あおあお♡

しゅ♡しゅ♡
しゅ♡しゅ♡
しゅ♡しゅ♡

だしてええええ♡♡
中にだしてえええ♡♡

ただただ膣奥に思い切り
射精するため、めちやくちやくに
腰を打ち続けた。

は〜

は〜

は〜

どちやっ♡

どちやっ♡どちやっ♡

どちやっ♡どちやっ♡

どちやっ♡

はあああ♡

ほおおお♡

もうイくう♡

出すぞー！
だすぞお♡

望み通り、最奥に、子宮の中に
思い切り射精した。

ほお♡ほおおお♡
おほおおお♡

ガク
ガク

おほ♡
ほおおお♡
お♡おおおお♡

その射精は俺の体の奥から、
すべての快楽が流れ出るような
感覚だった。

ガク
ガク
ガク
ガク

おおおおおお♡♡

んゅるる♡
びゅるる♡

はあおおおお♡♡

乳房を握りしめながら、
腔奥にどくどくと
種を流し込む。

お♡ほお♡

せうしう♡
入っくるよ♡

お♡
お♡

あったかい♡
お♡

悪友は腔内で精子を
受けとめ、ただただ
歓喜の声を上げ続けた。



はっ♡

お♡お♡

はっ♡
はっ♡



悪友は起き上がると、
興奮が抑えきれない様子で
顔を近づけてきた。



艶めかしく、生暖かい
吐息が顔に当たると。

はっき俺が出した精液が
ゴブゴブと腔から溢れてきた。

♡♡

はっ
はっ
はっ

はっ
はっ
はっ



そのまま両手をこっちらに伸ばし、
ぎゅっつと体を押し付けてきた。

巨大な乳房が体に押し付けられ
ムニムニとした感触が伝わる。

ぎゅっつ

むにむに

むにむに

むにむに

その胸が押し付けられる感触に酔いしれていると、
ふいに顔を近づけられた。

んちゅ♡

んぶう♡

ちゅ♡
れる♡
れる♡
ちゅ♡
れる♡

顔は止まることなく接近し、
そのまま唇を貪ってきただ。



ついでにむような優しいキスじゃなく、
こちらを飲み込んでしまいきやうなく、
激しいディープキスだった。

あぶっ♡

ちゅぶ♡

はあ♡

ちゅぶっ♡♡

舌を伸ばし、こちららの口内を
激しくまぜぐって来た。

大量の唾液が流れ込み、
ぐちゅぐちゅと音を立てる。



負けじとこちらも舌を絡め、
悪友の口の中に侵入し、思い切り貪る。

んっ!?

ぢゅるん

んっ♡

んっ♡

悪友は驚いた拍子に一瞬舌を止め、
くぐもった声を出す



俺はキヌしたままの姿勢で、不意打ちのようにならに挿入した。

ん!?

んん
んん
うん
♡♡♡

ちゅる
ちゅる
ちゅる

んぶ
うん
うん
♡♡♡

悪友は突然の刺激に、口を離し、

声を出さうとしたが、

俺は唇を押し付けて逃がけなかった。

ど
30
ん
っ

口を貪ったまま、抱き合ったまま、
楽しく膣穴に性器を出し入れする。

ん♡

ん♡
ぶ♡
ん♡
ぶ♡

ん♡
ぶ♡
ん♡
ぶ♡

ん♡
ぶ♡
ん♡
ぶ♡

ん♡

ん♡

ち♡
ち♡

ち♡
ち♡

ぶ♡

ぶ♡

ず♡

ず♡

ず♡

ず♡

ず♡

ず♡

キスの快感と挿入の快感で、
お互いの口から数倍の唾液が流れ出てきた。

舌を絡ませて、体を抱きしめあつたまま、
本日2度目の子種を腔奥に流し込む。

ふうふうふう♡♡♡
ふ♡ふうふう♡

んぶううう♡
ふう♡ふう♡

んぶ♡
んぶうううう♡♡♡

悪友も同時に絶頂を迎えたようで、
びくびくと腔が脈動させて肉棒が締め付けてきた。



精液を出し切った後、
ゆっくりと口を離し、
はあはあと息を整える。

は♡あはあ♡
はあ♡はあ♡

お願い♡おねがぁい♡
ねん♡もっ♡としたい♡
してん♡してん♡ねん♡

悪友は何度も絶頂したにも関わらず、
とろんとした目からはまだ情欲の火は消えていない。
口からは甘えきったおねだりの声が響いた。



悪友は興奮したに俺を押し倒してきた。

屹立した男性器に顔を近づけ、発情しきった顔でそれを見つめていた。

はっ はっ はっ
はっ はっ



悪友は男性器を前にして発情しきった顔で
それを見つめていた。
息を荒げさせ、口から唾液があふれさせている。

ドキ

ドキ

ドキ

ドキ

ドキ

は

は

は

おあずけをくらった犬のような顔で
俺の口から命令されるのを
待っているかのようだった。



俺はやれを見て察する。
そして一言命令する。

しやぶれ

!

ドキ

ドキ

ドキ

ドキ



命令を耳にすると、悪友は嬉しきうに口をすぼめ、ぱくりとちんこをくわえこみ、下品な音を立てて、パキユームし始めた。

んん♡

♡

♡

ぽんり♡

♡
おおおおお♡

♡
おおおお♡

♡
おおおお♡

ちんこを吸い尽くされきうな感覚に、俺も快感の声を上げざるを得なかった。

そのままぐぐると、
根元までちんちんを
飲み込んでしまった。

ころるるっ♡

ん♡

ん♡

ぢゅ♡

ぢゅ♡

おぉおぉお♡

お♡

ぢゅ♡
ぢゅ♡

おぉおぉお♡

ペニス全体が生暖かく、
ぬるりとした刺激に包まれる。
初めての感覚に脳が蕩けやうになっていた

目の前でじゅぽじゅぽと
下品な音を立て、
親友の妻が、俺のちんこを
夢中でしゃぶっていた。

んんんは
ぐぐ♡む
う♡んう
う♡ん♡
♡♡

んん
ん♡
ん♡
♡♡

んぶん
♡うぶう
ぶ♡う
♡♡

ちゅ♡
♡

ちゅ♡
♡
♡
♡

ちゅ♡
♡
♡
♡

は♡
♡

悪友は何度も何度も
ちんこを丹念に飲み込んで、
ずるるうっつと引き抜く往復運動を
繰り返す。

あぶ♡

んん♡
んん♡

れれれ
ろろろ
るるる
♡♡♡

んん♡
ぶん♡
ぶう♡

ちんこはよだれと我慢汁で
べちゃべちゃになっ
ていた。

ちんこ
べちゃべちゃ

ちんこ
ぶるるる

ずるる
うっつ

悪友はヤゴで思い出したように
動きを止める。
その時少し意地悪やうな
顔をしたのを見逃さなかった。んま

んま

んま

んま〜♡

んま〜♡

んま〜♡

んま

んま

体を少し動かすと...



巨大な乳房を俺の体にむにゅと乗せ、
ペニスを挟みこんだ。

んふ〜♡

♡

♡

ふ〜

ふ〜

ふ〜

むにゅ

むにゅ

ペニスは豊かな胸にすっぽりとうずもれ、
今まで以上の快感が俺を襲った。

そのまま激しく胸を上下に動かして
俺のちんこから精液を絞り出せんと
締め付ける。

んふう♡

んん
んん
んん
♡♡♡

んは
んは
んは
♡♡

んん
んん
んん
♡♡♡

胸だけでなくフエラも再開し、
両方の快樂で俺は情けなくも
喘いでいた。

ずい
ずい
♡♡

ずい
ずい
♡♡

ちゅ
ちゅ
♡♡

ちゅ
ちゅ
♡♡

ちゅ
ちゅ
♡♡

おお♡

おお♡

おお♡
おお♡
おお♡

ずい
ずい
♡♡

そのまま口と乳房での
搾精行為は続いていく。

んちゅぶう♡
んぶ♡んぶ♡

ぢゅう♡
ん♡ん♡
る♡う♡

んぶ♡んぶ♡
んぶ♡う♡う♡

その激しい攻めに、
俺はあっという間に限界を迎えてしまいきうだ。

ちゅ♡る♡
れ♡る♡
ちゅ♡る♡
ちゅ♡る♡

す♡り♡あ♡

ちゅ♡ちゅ♡
ちゅ♡ちゅ♡

ちゅ♡る♡

あ♡
出る♡う♡う♡

す♡り♡あ♡

やしてとうとう限界を迎える。そして
大量の精液が、悪友の喉に噴射される。

んんん♡

んんん♡

悪友は待ちに待ったという歓喜の表情で、
精液を逃がさんと、口いっぱい受け止める。

♡射射射射♡

♡射射射射射♡



爆発するような射精は続き、
悪友はそれを夢中でぐくぐくと
飲み干していく。

んんん
ぐぐぐ
んんん
ぐぐぐ
んんん
ぐぐぐ
んんん
ぐぐぐ
んんん
ぐぐぐ
んんん
ぐぐぐ

んんん
ぶぶぶ
んんん
ぶぶぶ
んんん
ぶぶぶ

飲みきれなかった精液が
口の中から溢れて出ていた。



最後の一滴まで飲み込んだ後、
ようやく性器を口から離した。

口から離しても愛おしげうな目で
それを眺めていた。

あはあ♡

はああ♡

たくさあん♡
せうえきい、
おいしかったあ♡

へん♡えへん♡

そのいやらしいメス顔を見て、
どんどん俺の中で精子が
作られていくのを感じた。

ははは

ははは

ははは

ははは

ははは

キュン

キュン

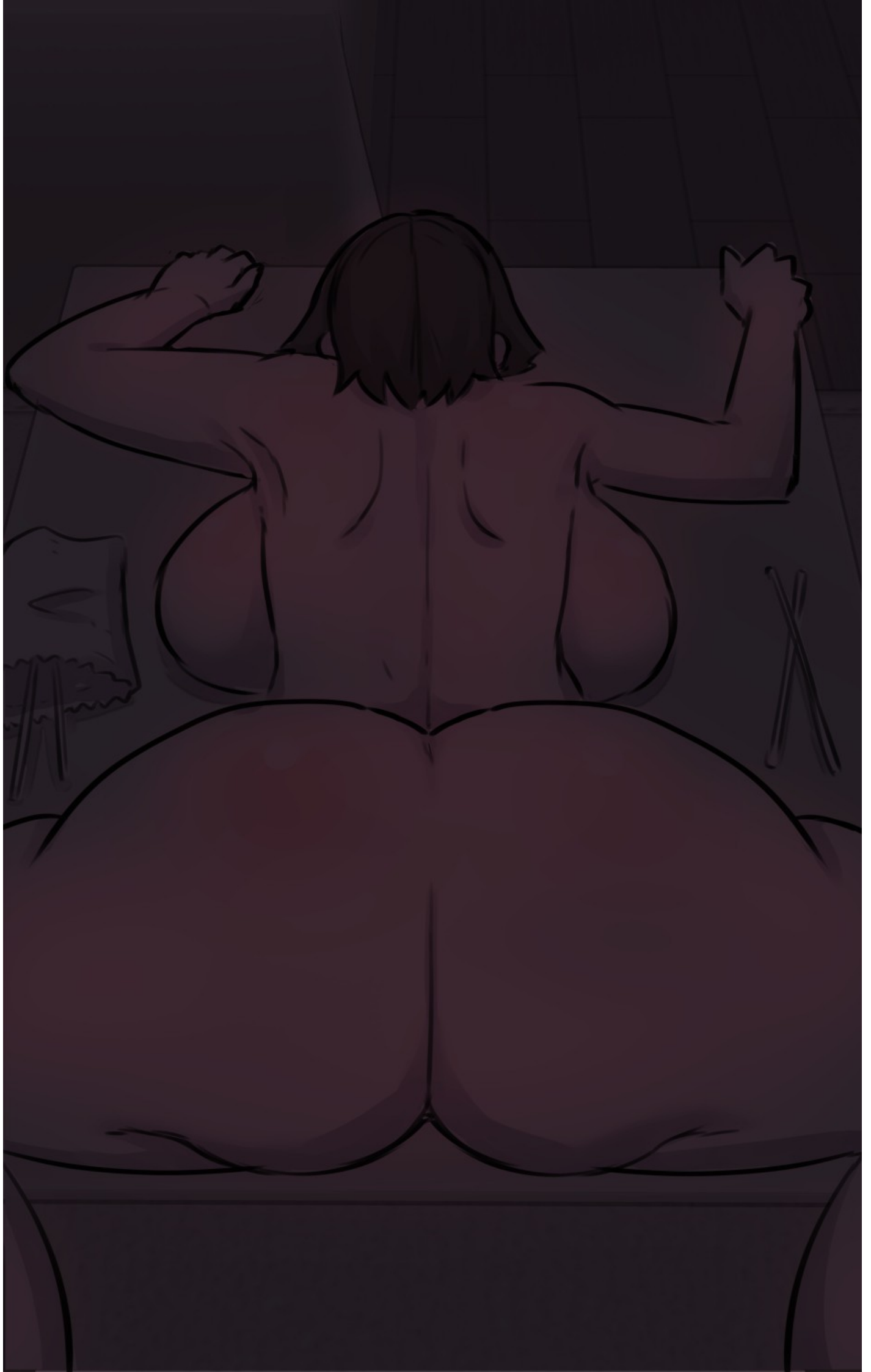
キュン

キュン

キュン







俺は強引にテーブルに彼女の体を押し付けた。

衣服を全て脱ぎ捨てて一匹のメスになった
あられもない姿がそこにあった。



さっきまで二人で酒を囲っていた
冷たいテーブルに、
彼女の豊満な体が押し付けられている。

彼女の豊かな乳房がぎゅむっとテーブルに
押し付けられ、歪で淫らな形に変形した。

むいっ

むいっ



やして、形のよい尻が煽情的に
こちらに向けられていた。

ふっ
ふっ

ふっ

俺はその姿に情欲を抑えられるはずもなく、

むわっ

むわっ

ふっ
♡

ふっ
♡

後ろから、一気に、
彼女のメス穴に男根を突き入れた。

ほ♡

ガク

ガク

ガク

ガク

ガク

おお♡

おお♡♡♡♡♡

ガク

びゅんびゅん

彼女は全身びくびくはせながら、
×の嬌声を上げていた。

お♡

おお♡
おお♡

お♡

おお♡
ほお♡

後ろから突き刺した×ス穴は
ぎちぎちと俺のペニスを締め上げ、
快感を与えてくる。

びん

びん

びん

びん

びん

びん

びん

ぎち♡

ぎち♡

おお♡

お♡

ふ♡

そのままがむしからに
に腰を何度も打ち付ける。

ズン

ズン

はへん♡

はへん♡

はふっ♡

あ♡
あ♡
あ♡
あ♡
あ♡

はへん♡

ズン

ズン

ズン

ズン

ズン

ズン

ズン

あ♡

あ♡

あ♡

ぽんぽんと腰を打ち付けるたびに、
彼女のメス声が木霊する。

両手で尻をがっちり拘束して、
射精するために無理やりに腰を受け付ける。

はぁ♡あぁあ♡
あぁあ♡は♡♡
あぁ♡あぁあ♡

ん♡
ふぐうう♡

あぁあ♡
あぁあ♡あ♡

まるで、悪友を自分の所有物にしている、
征服しているような気持ちだ。

ガク

ガク

ガク

ゆさっ

ゆさっ

ほちゅん♡

ほちゅん♡

ほちゅん♡

おお♡

ほちゅん♡

ほちゅん♡

普段はがっつで勝気な悪友は、
ただ今は俺に拘束されて、
なすが儘にメス声を上げる
獣に成り下がっていた。

ん♡
んぎゅう♡

ん♡
ん♡

ん♡
ん♡
またん♡
またん♡

その痴態を見て、
猛烈な快感と征服感で満たされていた。

ん♡

ん♡

ん♡

ん♡

ん♡

ん♡

ん♡

ん♡

ん♡

ん♡

ん♡
ん♡
ん♡

俺はただただ自分勝手に、
悪友の膾炙を貪るように、
腰を打ち付けていき、
その快感に俺も声を上げてしまおう。

ひひひい
イってるうう
なんどもお

ひい

こびん
初めてん
このお

後ろを向いた悪友の顔は見えないが、
そのメス声のトーンから、
どのような下品な顔をしているかは
想像に難くない。

びん
びん
びん

す
す
す

す
す
す

す
す
す

おおお
お

イケん

ほらいけん

す
す
す
ん
ん

す
す
す
ん
ん

メス穴を後ろから犯す具合の良さに、俺はもう射精だった。思い切り子種を植え付けるため、更に腰を打ち付ける激しさを増していく。

ほお♡

い♡イ♡イ♡
イ♡ウ♡
何度もお♡

ほ♡

ずっとお♡イ♡ってる♡
きもぢい♡い♡い♡♡
お♡またイ♡べ♡う♡♡

悪友は狂ったように何度もイキ続け、そのイキ声は更に俺を興奮させてくれた。

ガク
ガク
ガク
ガク

す♡ふ♡ん♡
す♡ふ♡ん♡
す♡ふ♡ん♡
す♡ふ♡ん♡

栗に♡
精子出すぞお♡

お♡お♡お♡
お♡お♡お♡

最後の一発を加えるため、
ずるつとペニスを引き抜き...

あ?

あ♡♡

ズン
ズン

ズン
ズン
ズン

ズン

ズン

ズン

ズン

ズン

ズン

ズン

ズン

あ♡♡♡♡♡
あ♡♡♡♡♡
あ♡♡♡♡♡

あ♡♡♡♡♡
あ♡♡♡♡♡
あ♡♡♡♡♡

ズン
ズン

ズン

ずるっ
ずるっ
ずるっ

ふん♡

ふん♡

ふん♡
ふん♡
ふん♡

ペニスを引き抜くと、
割れ目からあふれ出した精液が
ドロドロとこぼれだしていった。

あ♡
はああ♡♡♡びん

せしっ♡
しっ♡
しっ♡
しっ♡

あ♡
ん♡
ん♡
ん♡
ん♡
ん♡
ん♡

彼女はびくびくと
尻を震わせながら、
いき続けた余韻に浸っていた。

びん

びん

びん

びん

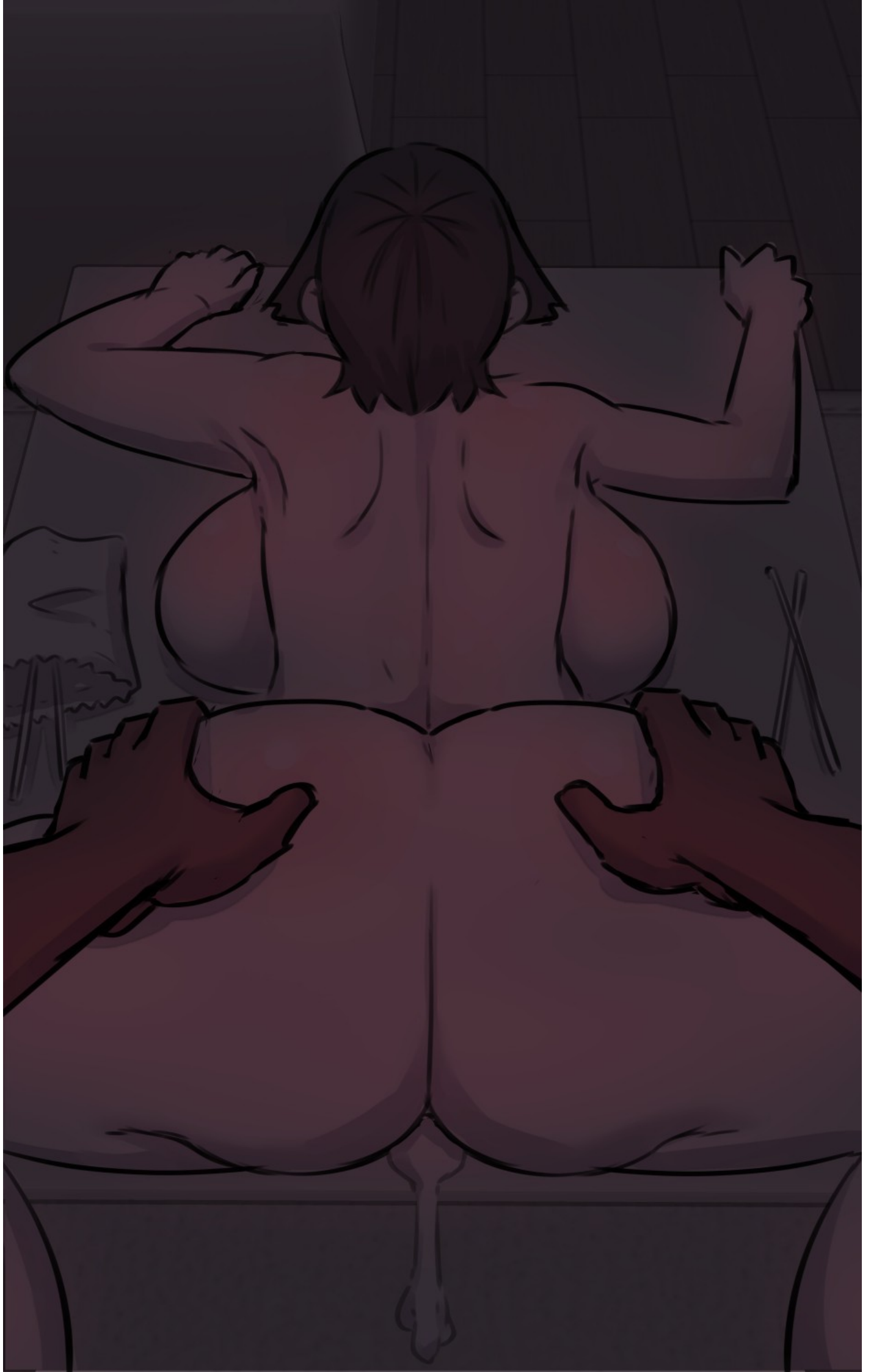
びん

ふ♡
♡

ふ♡
♡

あ♡
ん♡
ん♡
ん♡

あ♡
ん♡
ん♡
ん♡



あれから何時間たち、
何度の交尾をしたか
もわからない。



俺は彼女をベッドの上に押し込めた。



彼女は抵抗せずがままに横たわり、
自分の恥部を全てさらけ出した。

呼吸が荒い、醜態をさらしている
自分に興奮しているようだ。



俺は、ゆっくりと彼女の割れ目に
亀頭の照準を合わせた。

ぴとり

ぴとりと亀頭と割れ目がキスをする。



彼女割れ目から、
じわりと愛液が流れ、
俺の亀頭を濡らした。

じわ
あ

彼女はただただそれを、
興奮した目で凝視している。

これから思い切り犯される期待に、
全身を震わせれていた。



何の前触れもなく、
一気にペニスを奥まで突き入れた。

ズ
!?

お
お
お
お
お
お

あ
ち
ゅ
ん

入れた瞬間に射精をし、
彼女の腔穴に大量の
精液を流し込む。

お、お、お♡♡♡
お、お、お♡♡♡
お、お、お♡♡♡
お、お、お♡♡♡
お、お、お♡♡♡
お、お、お♡♡♡

その強烈な一突きで、
彼女は絶頂してしまい、
だらしなく嬌声を上げる。



精液を出したまま、
何度も何度も出し入れを繰り返す。

いっ♡

ほお♡

いっ♡
いっ♡

やめ♡
ぐ♡

またいっ♡

お♡

いっ♡
いっ♡

ずん♡

ずん♡

ずん♡

ずん♡

いっ♡
いっ♡

いっ♡
いっ♡

1回突く度に、彼女が震え、
絶頂の悲鳴を上げる。

そしてまた射精する。
彼女の膣内がズブズブと音を立ってた。

ほおおお♡♡

せえき♡
でてる♡
また出てる♡

おおお♡
きもぢい♡
イク♡イク♡

膣に精液を出される度に、

彼女の悦びの聲が高くなる。

申出しの快感が完全に癖になっているようだ。

がが

がが

がが

がが

がが

まだまだ申出しは足りない。
もっとうもっとうだ。

あすあす♡♡

また♡またあ
下ってるのいい♡

だめ♡
だめえ♡

止♡とめえ♡止めてえ♡
止め♡とめええ♡

俺は自分が満足するまで、
何度も何度も鋭くピストンし……

ぽろぽろ

ぽろぽろ

ぽろぽろ

ぽろぽろ

ぽろぽろ

ぽろぽろ

がく

がく

がく

がく

がく

がく

その後...

満足するまで中出しをした後、

♡♡

♡♡

♡

ずるるうと

ゆっくりとピニスを膣から引き抜く。

びしょ

びしょ

びしょ

びしょ

びしょ

びしょ



一度もペニスを
抜かなかった腔穴からは、

何度も中出しして
溜まりに溜まった精液が
ぷるぷると溢れ出ていた。



彼女が快感で痙攣するたびに
愛液が噴き出される。

ほ♡

お♡

こお♡

精液と愛液で、ベツビツの上の
べつたりとしたグムグムを作った。
いた。いた。



それでも、まだまだまだ夜は長い。





俺は豊満なこいつの体を後ろから動けないように
がっちりを固定して、ちやぐちやに犯していた。

ふおおおお
おおおお

お♡

お♡おほ♡

おほお♡

はじめん♡
こんなのはじめて
だよおお♡♡

おほ♡

強引に攻めているのだが、こいつの声は甲高く、
心から犯されているのを喜んでいるように見えた。

おほ♡
おほ♡

おほ♡
おほ♡



何度も何度も下から突き上げられ、
こいつの顔は快楽に歪み涎を垂れ流し、

(♡えん♡)

お♡お♡♡

(ん♡)

(んえん♡)

えん(ん♡)(ん♡)

えん♡♡♡

お♡お♡♡

お♡♡♡

ただただ快楽の声を上げるだけだった。



何度も何度も下から突き上げられ、
こいつの顔は快楽に歪み涎を垂れ流し、

(♡え(♡

お♡お♡♡

(♡

(♡♡

え(♡(♡

えふっ♡♡

お♡お♡♡

お♡♡♡

ただただ快楽の声を上げるだけだった。



喘ぎはどんどん大きくなり、攻め続かれた
肉体は絶頂の限界を迎えていた……



あゝ
あゝあゝ
あゝあゝあゝ

あゝあゝ
あゝあゝあゝ

あゝあゝあゝ
あゝあゝあゝあゝ

あゝあゝあゝ
あゝあゝあゝあゝ

あゝあゝ
あゝあゝあゝ

あゝあゝ
あゝあゝあゝ

あゝあゝ
あゝあゝあゝ

あゝあゝあゝあゝ
あゝあゝあゝあゝあゝ

あゝあゝあゝ
あゝあゝあゝあゝ

あゝあゝあゝ
あゝあゝあゝあゝ

あゝあゝあゝ
あゝあゝあゝあゝ

やして、体を大きく仰け反らせ
痙攣しながら絶頂を味わっていた。



なにやらピクピクしながら絶頂の余韻に
浸っているようだが、

お……♡

お……♡

お……♡

ちよろろ♡

い……♡

俺はまだ全然満足してないので……



不意打ちのように、後ろから思い切り胸をこねくり回した。

!?

ふざお♡♡

ズくん♡

お♡♡

だめえ♡

おっばいだめえ♡
ぎぎゅってえ♡
しないでえ♡♡

お♡お♡わいからあ♡

まだあ♡イってるのこい♡

巨大な胸はどこまでも柔らかく
指の動き通りに形を歪ませていく。

かきゅん♡
かきゅん♡

は♡

しゅん♡
しゅん♡

しゅん♡
しゅん♡

かきゅん♡
かきゅん♡

しゅん♡
しゅん♡



巨大な脳をぐるぐる回しながら、
そのままだに切り下から突き上げ始めた。

おっ！おっ！おっ！

おっ！おっ！おっ！

おっ！

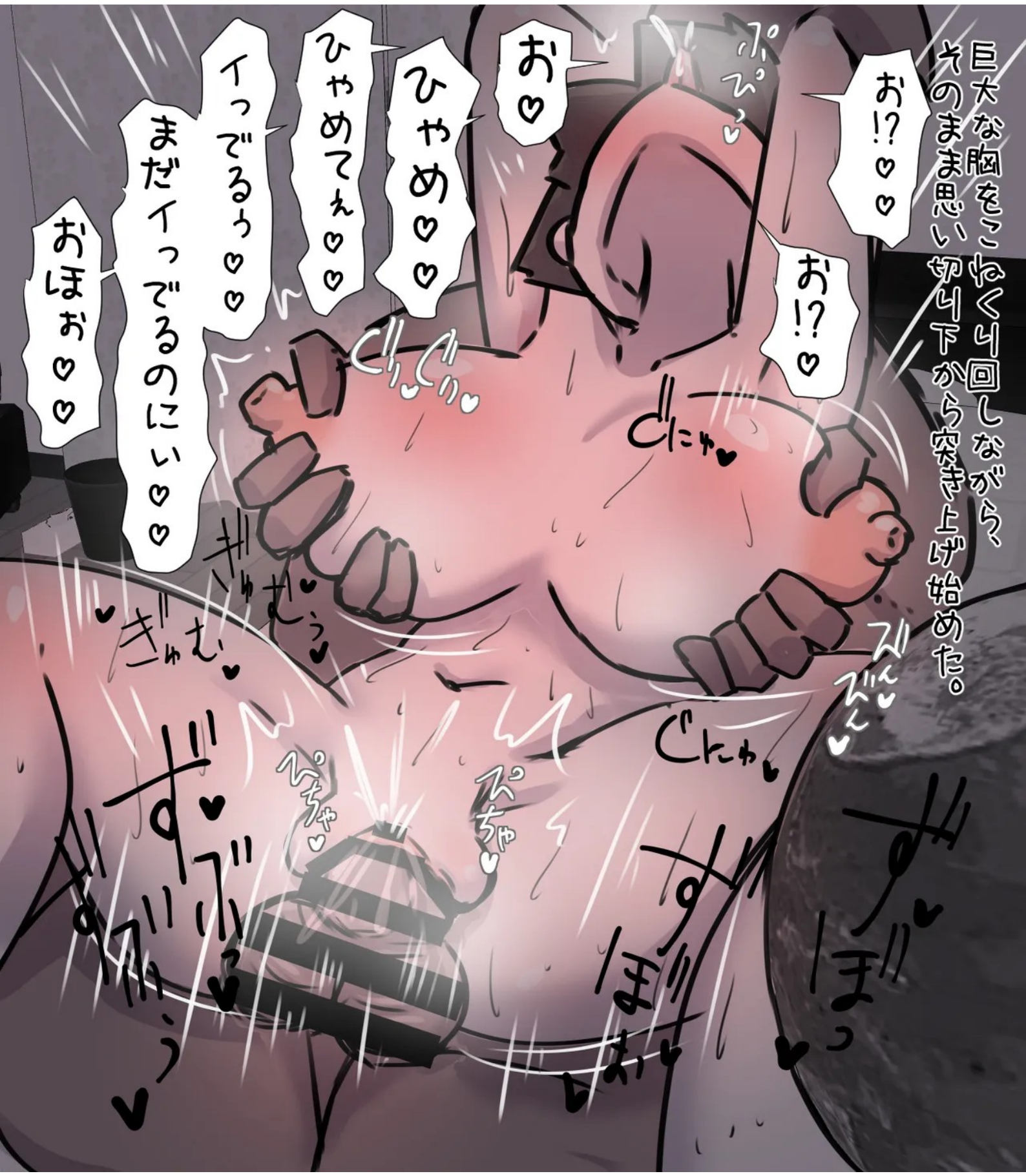
おっ！おっ！おっ！

おっ！おっ！おっ！

おっ！おっ！おっ！

おっ！おっ！おっ！

おっ！おっ！おっ！



乳房と膣、2つの強烈な刺激に、
今まで聞いたことのない嬌声を上げて
昂っている。

あゝ♡

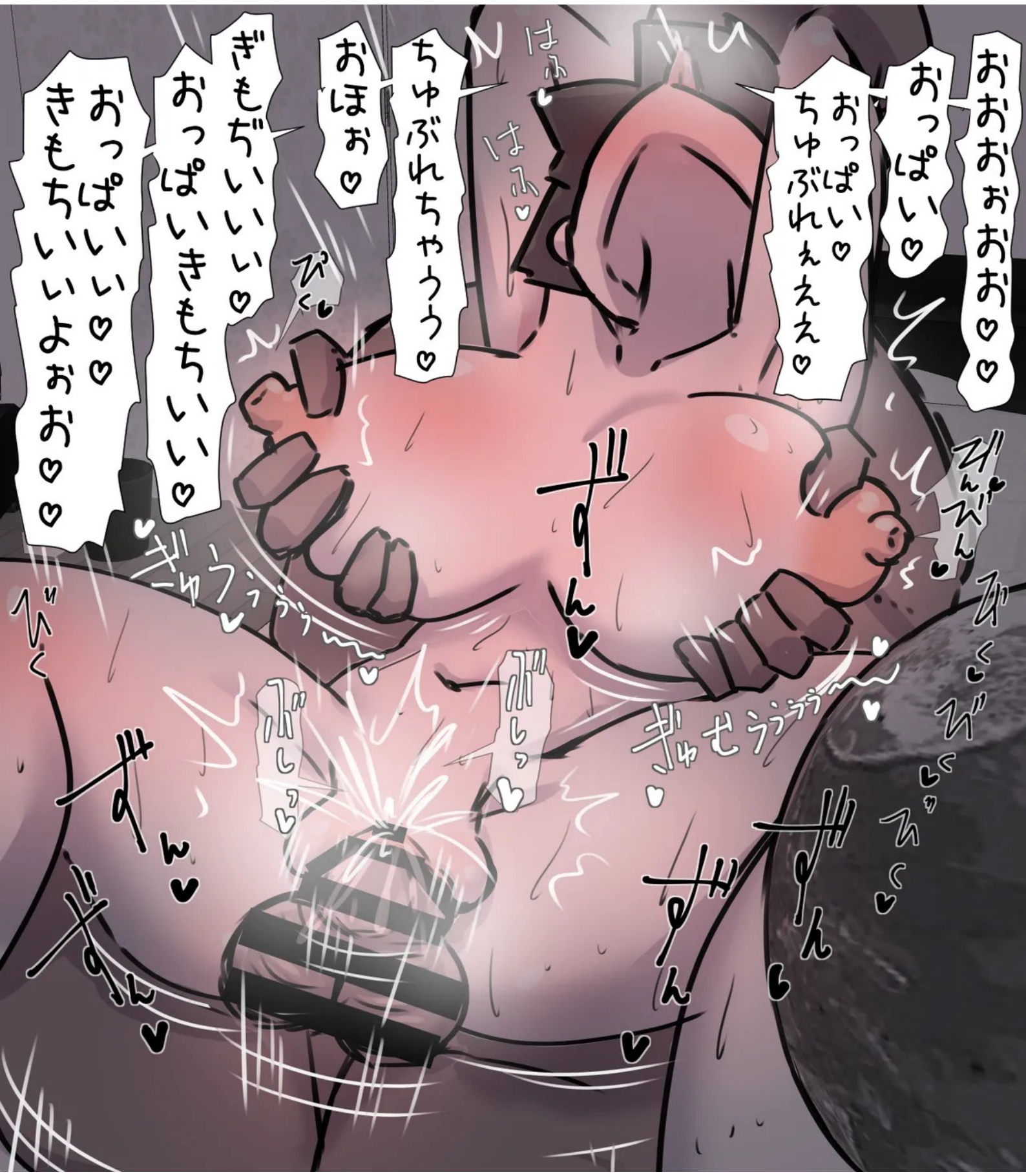
おおおおお♡

こゝお♡

あゝおおおおおおおおお♡♡♡

あゝおおおおおおおおお♡♡♡





おおおおおあおあおあ♡♡♡

おあおあおあ♡♡♡

おっはい♡
ちゅぶれえええ♡

ちゅぶれちやうう♡

おほお♡

おあおあおあ♡♡♡
おあおあおあ♡♡♡

おあおあおあ♡♡♡
おあおあおあ♡♡♡

はーん

はーん

はーん

はーん

はーん

はーん

はーん

はーん

今まで以上にストロークを強くして、
腔を握り、犯しつづけます。

!?!?♡♡♡

お!?!?♡♡♡

おほお!?!?♡♡♡

っよ!?!?♡♡♡

らめ!?!?♡♡♡

イグ!?!?♡♡♡

またイグ!?!?♡♡♡

もうイグ!?!?♡♡♡

腔の締め付け、胸を揉みしだぐ快楽に
俺も限界を迎えちゃうになり…

イグ♡♡♡イグ♡♡♡
イグ♡♡♡イグ♡♡♡



悪友は体を痙攣させながら

あゝ……♡

あゝ……♡

あ……♡

あほ……♡

あゝ……♡♡

ただただ腔に注がれる精液を受け入れ、
絶頂の余韻に浸り続けていた……



夜はまだ続いっけいっせ…





それから何度射精して

何度絶頂させたかわからない。

悪友は、俺の腰の上で、
虚ろな目をしながら
腰を揺らしていた。

ほ♡
ほ♡

おほお♡

おほお♡

えん♡

口の端からは、
だらだらと涎を
垂らしている。

は♡
は♡
は♡
は♡
は♡
は♡
は♡
は♡

ゴッゴッ
ゴッゴッ
ゴッゴッ
ゴッゴッ
ゴッゴッ
ゴッゴッ
ゴッゴッ
ゴッゴッ



それでももごいっつは
まだ貪欲に快楽を求め、
腰を揺らしている。

（ん♡
ぐいぐい

えん♡

びび

もっ♡
もっ♡
もっ♡

もっ♡
もっ♡
もっ♡
もっ♡
もっ♡

腰を動かすたびに、
だらしなく胸が揺れ、
膣は快楽を貪っていく。

はっ♡

はっ♡

はっ♡

はっ♡

はっ♡

ぶるん♡

ぶるん♡

どちゅ♡

どちゅ♡

どちゅ♡

どちゅ♡

どちゅ♡

俺も、思い切り
腰を突き上げ、快楽を貪る。

おおおおお
ほおお♡♡
おおおお♡

お♡
ほおおおおお♡

彼女は膣奥を強く刺激され、
体を仰け反らせて
嬌声を上げて悦んでいた。



ずん



俺は焦らすつもりで、
一拍置いた後...

は♡あ♡ん♡

は♡

は♡

は♡

は♡

は♡

は♡

は♡

は♡

は♡

は♡

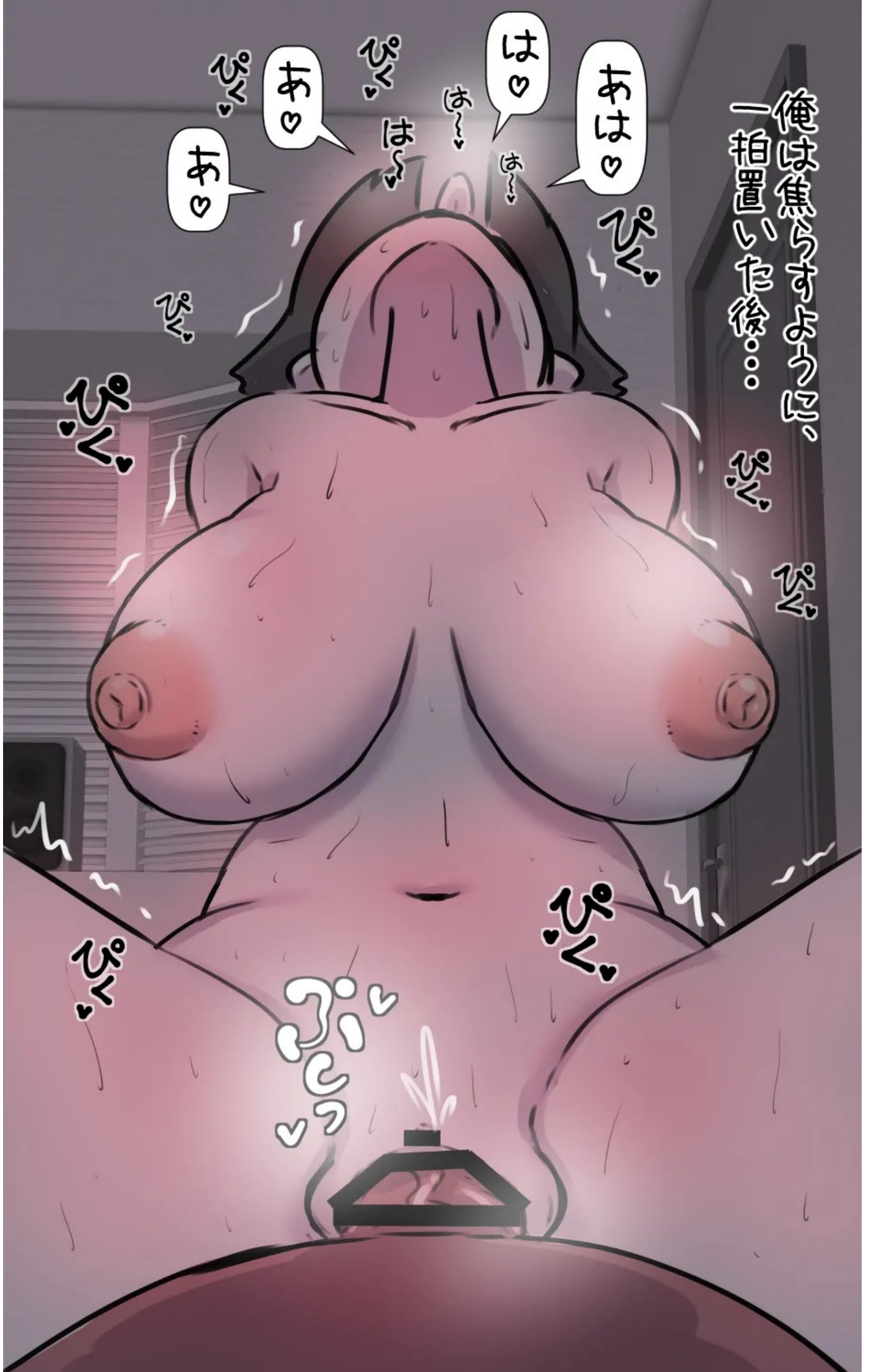
は♡

は♡

は♡

は♡

は♡



下からの激しい突き上げに、
軀も激しく揺れる。

はー♡

はー♡

がぐ

いっ♡

はー♡

はー♡

巨大な乳房が
煽情的に
揺れていた。

がぐ

がぐ

がぐ

がぐ

がぐ

ぱるん

ぱるん

がぐ

がぐ

がぐ

がぐ

がぐ

がぐ

おお♡
ほおお♡

お♡

ずいん

ずいん

ずいん

ずいん

ずいん

ずいん

ずいん

ずいん

ずいん

乳房を揉みしだき、乳首をつねり、だき、キして引っ張る。おもちやのよう雑に扱っていく。

おおお♡

いっ♡

おっばい♡

おっばい♡
イってるからあ♡

悪友はだらだらと涎を垂らして、胸が犯される。快楽に溺れていた。



俺も、もう駄目だった
膣の具合の良さだと、
胸の感触と。

おおお♡

イク♡

イク♡

ががが

がが

お♡

もうイク♡

来る♡

イクのくる♡

全てが俺に射精を
促し、もう限界を
迎える。

ががが

がが

ギョギョ

ギョギョ

ギョギョ

ギョギョ

ギョギョ

ずちゅ

はちゅ

とちゅ

とちゅ

はちゅ

とちゅ

ほおおお♡

ほ♡

出すぞお♡
だすぞお♡

はちゅ

ずちゅ

はちゅ

最後に思い切り突き上げ
射精をする。

イグイグ♡♡♡♡♡
イっぐうううう♡♡♡♡♡

おおお♡♡♡
おほおおお♡♡♡

噴水のように
精液が噴射され、
彼女の膣穴を浸食していった。

ガク
ガク
ガク

ガク
ガク
ガク
ガク
ガク
ガク
ガク
ガク

ぷんぷん
びゅん
びゅん
びゅん
びゅん
びゅん
びゅん
びゅん

おおお♡♡♡
おおお♡♡♡

おおお♡
おおお♡

今日一番の快感を伴う射精は
ズブズブと音を立てて、
悪友の膣内を満たして行く。

お♡
え♡え♡♡

お♡え♡
♡♡♡♡♡

え♡え♡
♡♡♡♡♡

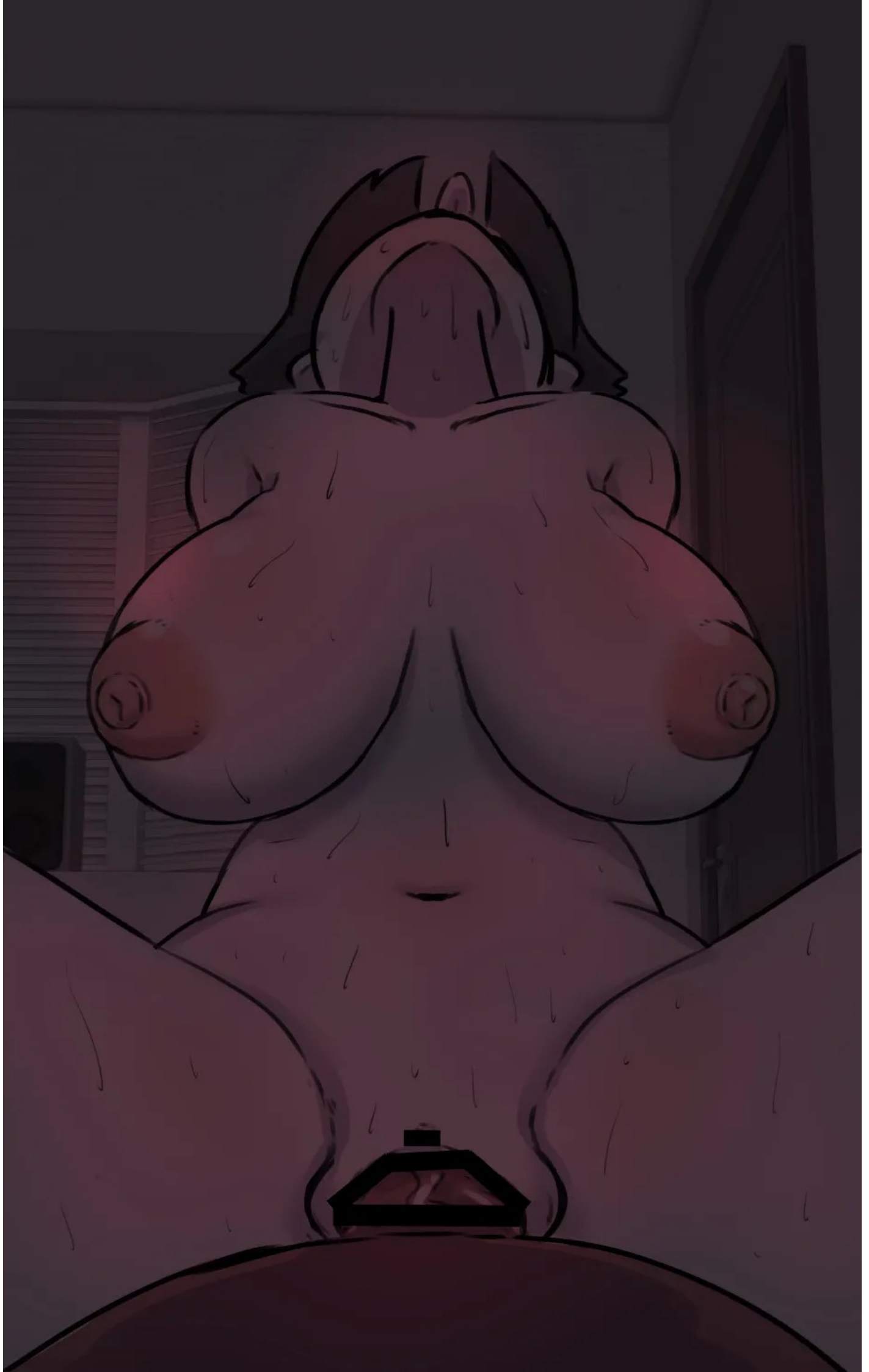
彼女は唇をだらしなく突き出し、
いきながら嬉しそうに受け止めていた。



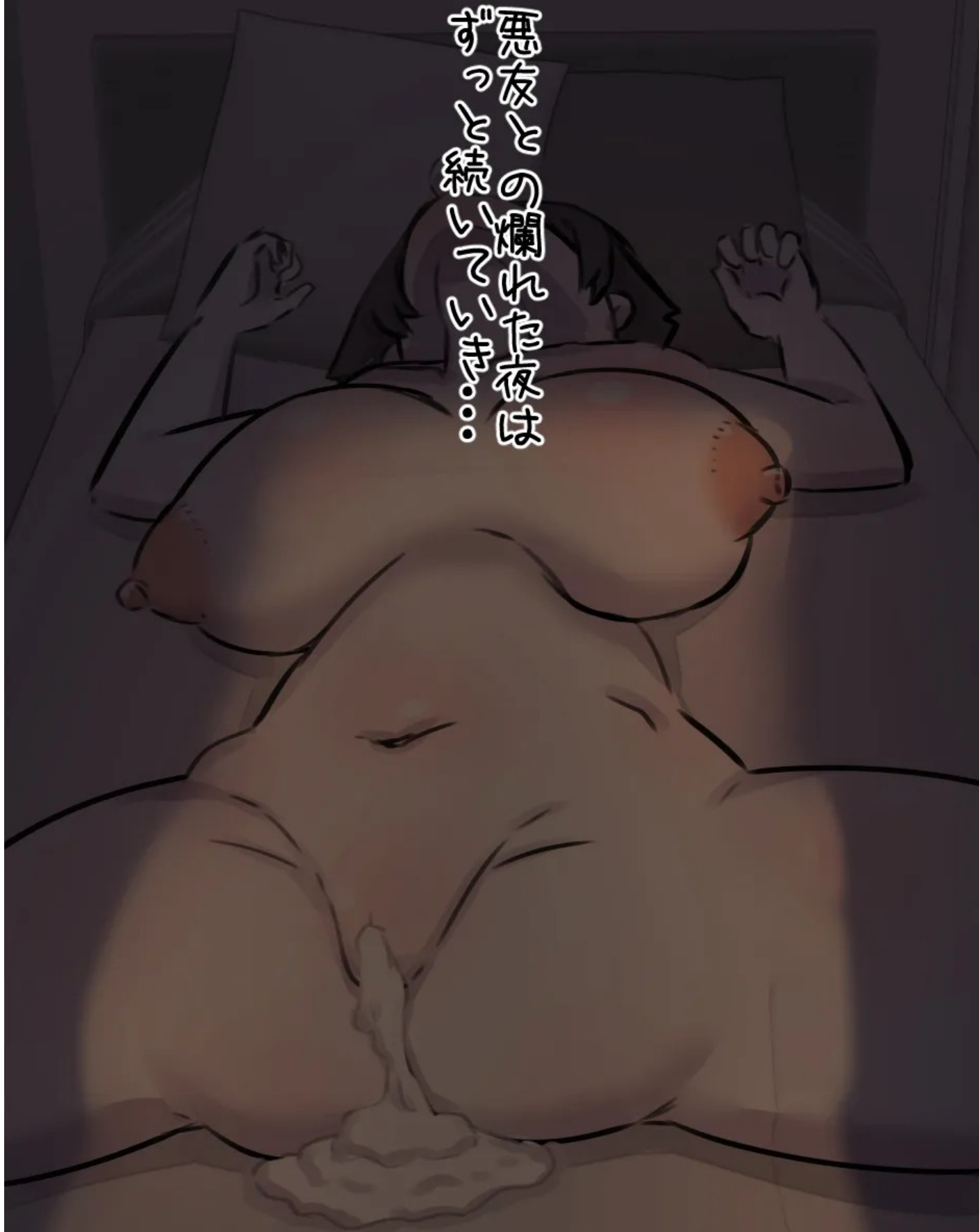
お♡

お♡ほ♡

ほ♡



悪友との爛れた夜は
ずっと続いていき……



気が付くと、夜明け前になっており、
窓からうつつすらと朝日が差し込んでいた。



何十と数え切れないくらい
繰り返したセックスは終わる。

あ♡

あ♡

あ♡

彼女はベッドの上で
割れ目からこぼれこぼれと
精液に垂れ流しながら痙攣していた。



やりすぎたのではないかと、
少し心配になる気持ちにはあったが

あはは♡

はあ♡

(♡)(♡)(♡)

かすかに聞こえるその声は満足げで、
嬉しきうに感じられた。



彼女は、軽く痙攣するたびに、
潮を吹き、どぷりと膣から
精液を吐き出していったが、

あ♡

ん♡

ん♡

はい

あ〜

ん♡

ん♡

ん♡

ん♡

ん♡

ん♡

そのまま満足げうに眠りについていた。

ん♡

ん♡

そして朝

でさく
信せってばさく

俺たちは何事もなかったように、
会話をした。

ただの幼馴染、昔ながらの悪友、
昨日までと同じ関係のようには。

ごく普通の、
今までと変わらない会話だった。



キしてドアの前で、悪友を見送った。

今度は信せと一緒に飲むことを約束して。



見送ったあと、ふと悪友のことを考える。



信也が来られないうことを事前に伝なかつたこと。
中止にしないで、1人で飲みに来たこと。

…あらかじめ、避妊薬を飲んできたらしくらいつつ。

おやうく、初めから「ハッハッハッ」の「おやうく」の
目的だったのだろうか。

信也と何かあったのか？


単に欲求不満だったのか？

。。。ありえないだろうが、俺に気が合ったのか。

結局のところ、全てはあいつの胸中にある。

考えても、俺には理解できる余地はない。





我ながら薄情なこと、
親友の妻を寝取ったことの罪悪感には薄かった。
ただただお互い求めあった、それだけなのだ。
そして俺たちは快楽の蜜の味を知ってしまった。
俺たちのセックスの相性は最高だったようだ。

あいつは、信也に欲求不満だったから、
手短かな俺に行為を求めたのだろうか。

。。。やはり考えても仕方ない。

あの情事から、数週間立つ。

ただ、何となくだが、俺が予感していることは……。



ぴんぼろん

きっとあいつは、
これから何度も俺の所に来るのだろう、
ということだった。

信也を連れずに。



おまけ

など

よし
元気かし



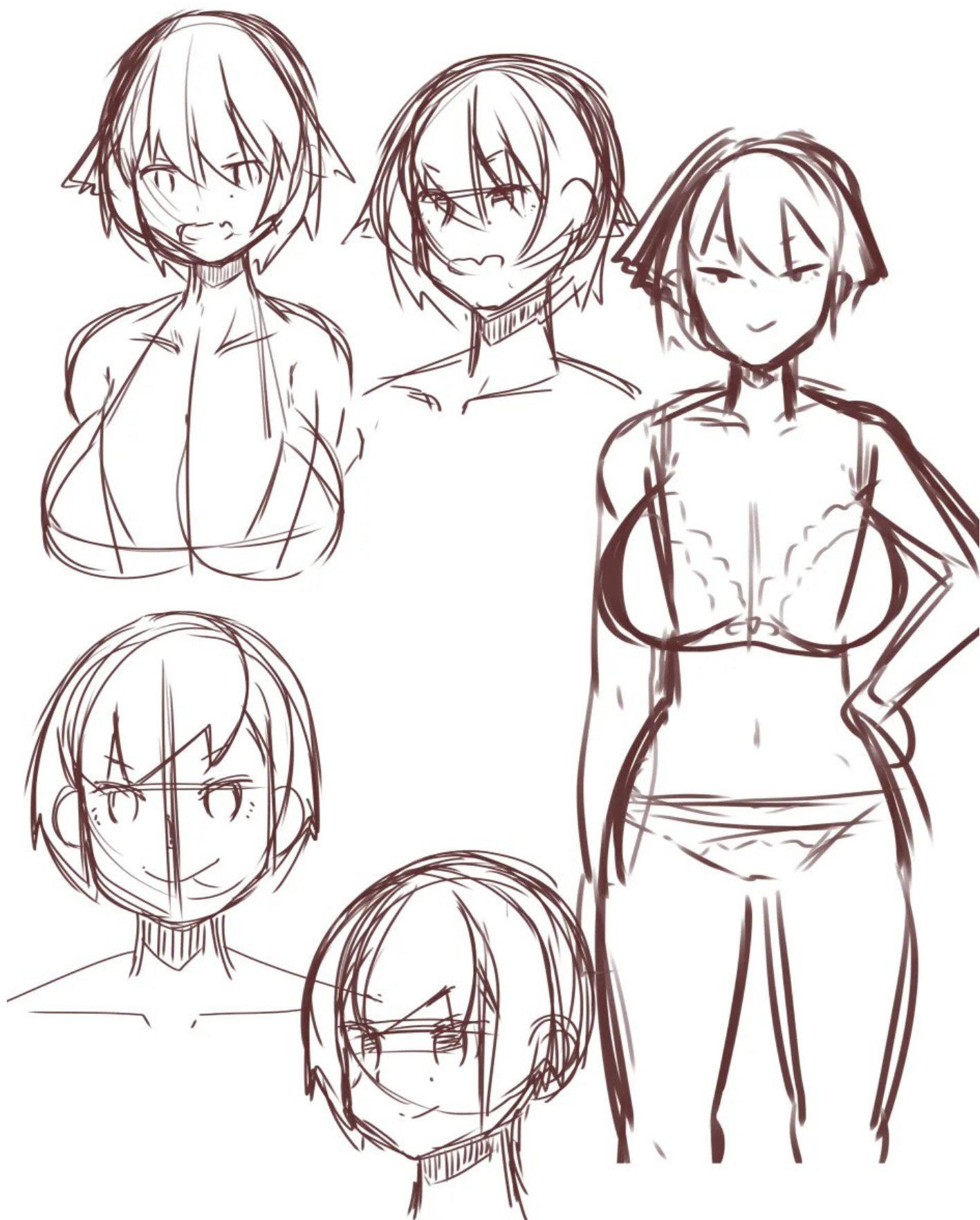
※初期キャラデザ

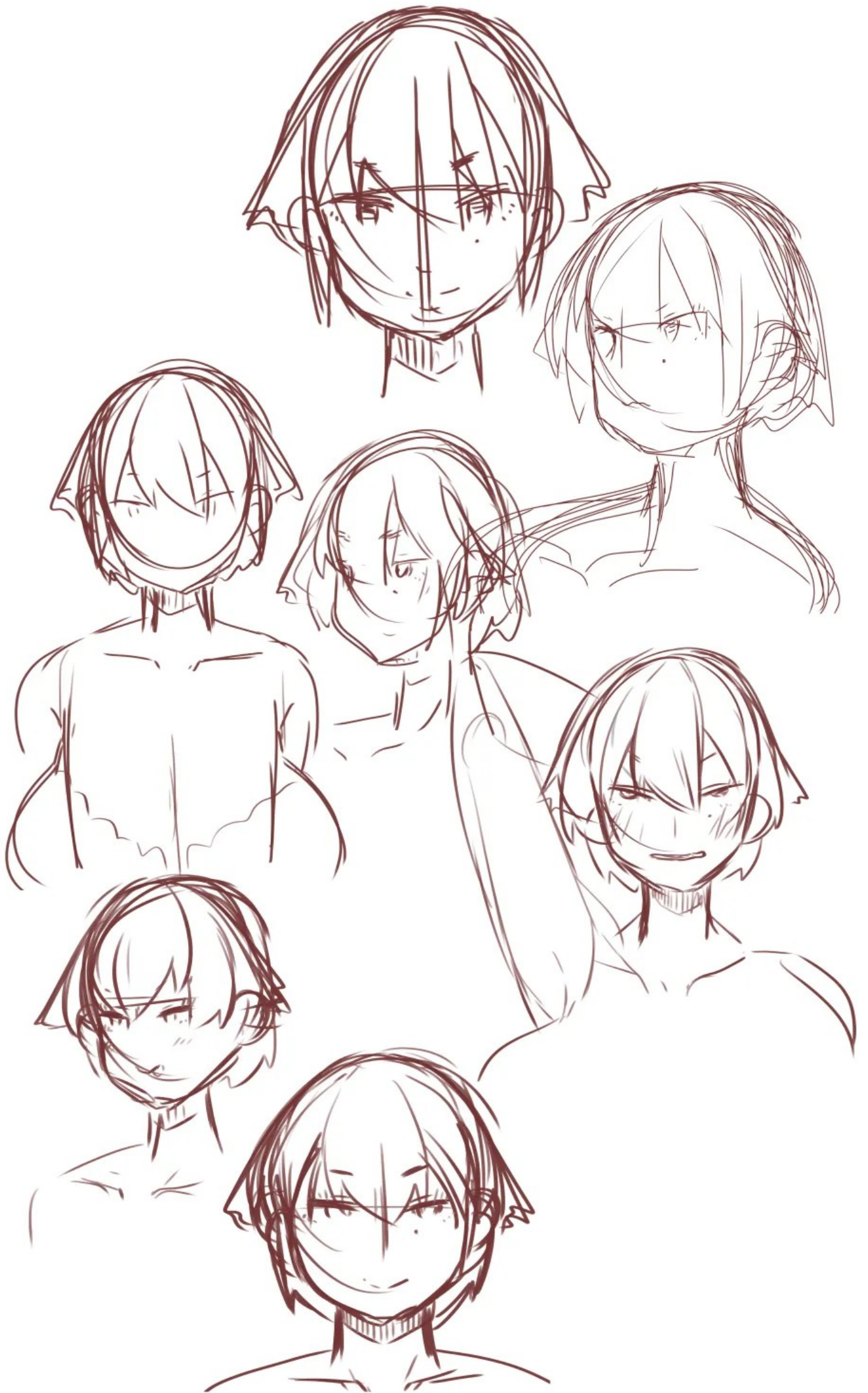
【設定など】

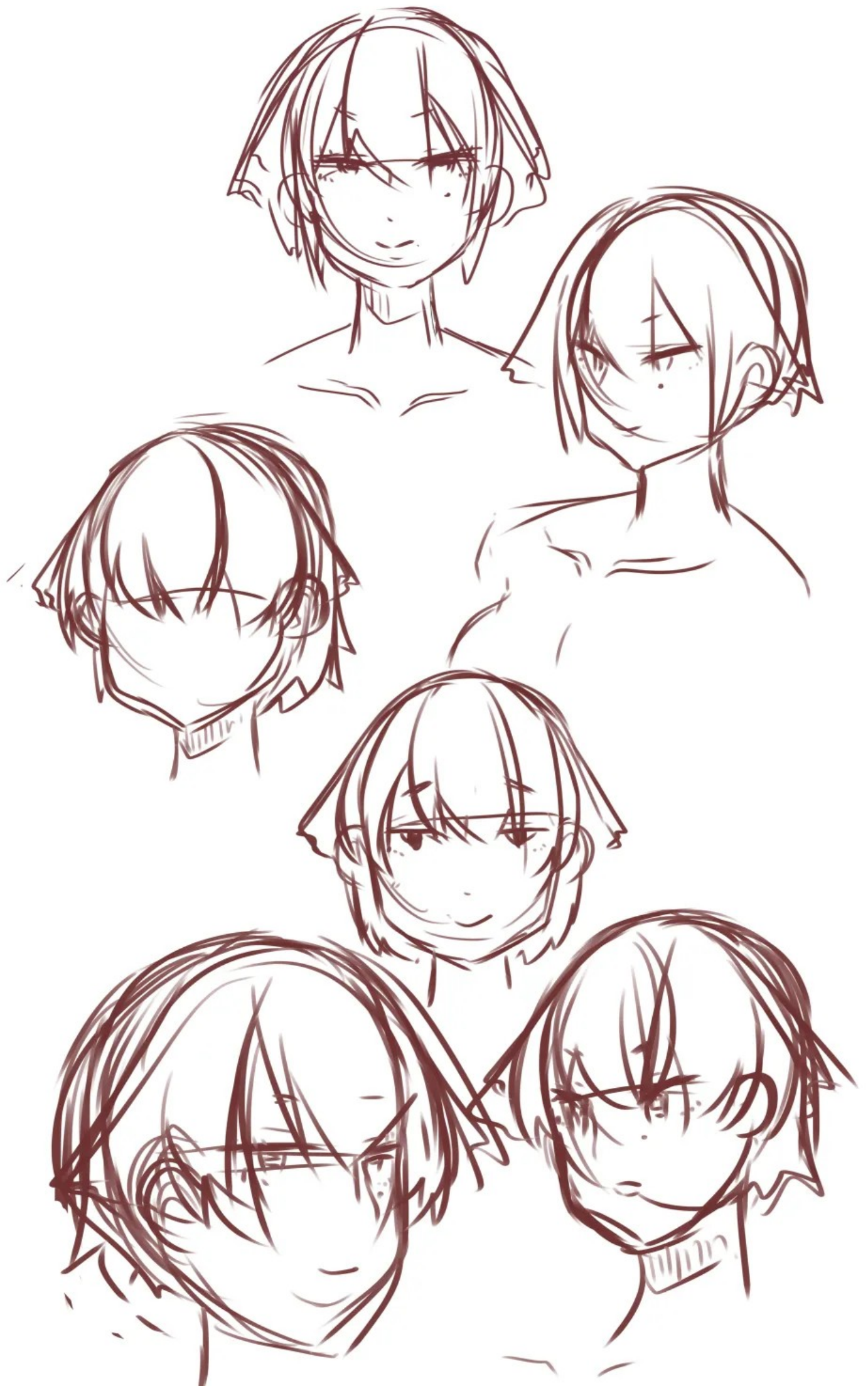
- 29歳
- 身長165cm、体重59kg
- B105(I)、W65、H86
- 信也と3人と小学生からの幼馴染
- 信也とは高校生から付き合い始め、社会人3年目で結婚
- サバサバした性格で女にもモテていた
- 交際、経験相手は信也のみ
- 実は性欲がものすごく強いのだが、信也は優しすぎるので満足したことはなく、それどころか今まで、一度も満たされたことはなかった
- 主人公と関係を持って、初めて肉欲を満たすことが出来た
- 主人公と関係を持った後、信也には申し訳ないと思いつつ、あの晩のことを忘れることができない



色々なキャラデザイン過程の
ラフなど





















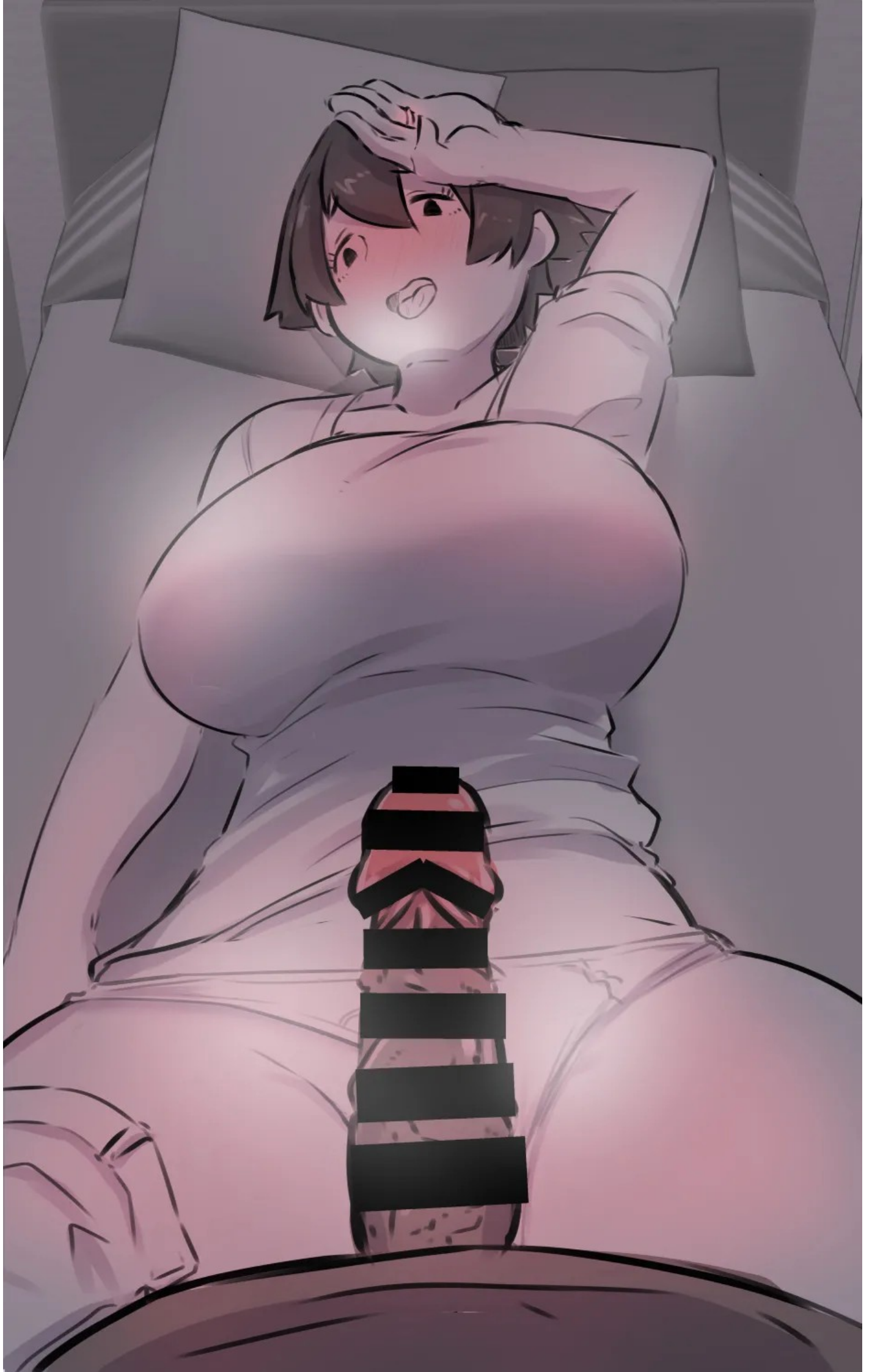




























































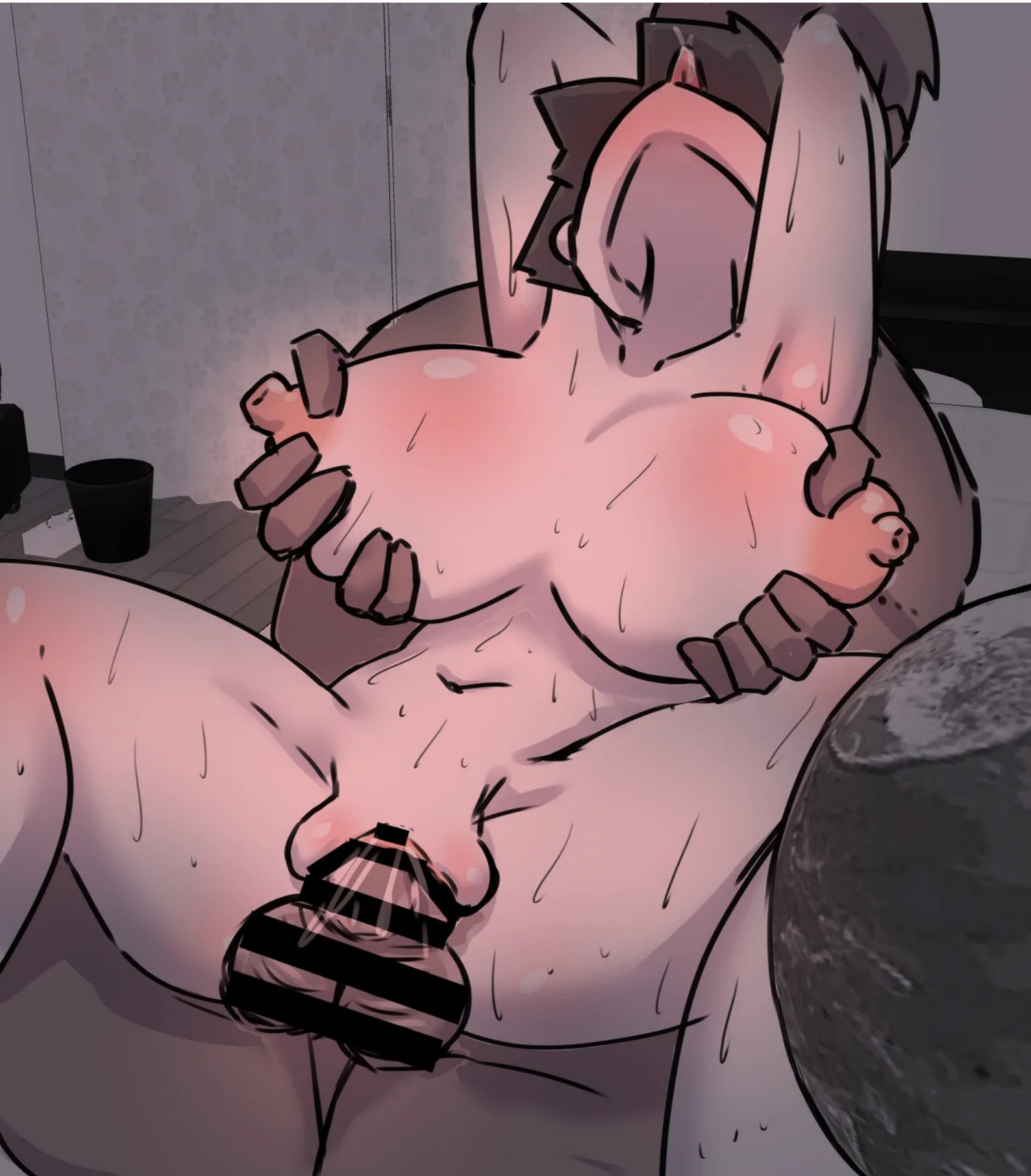








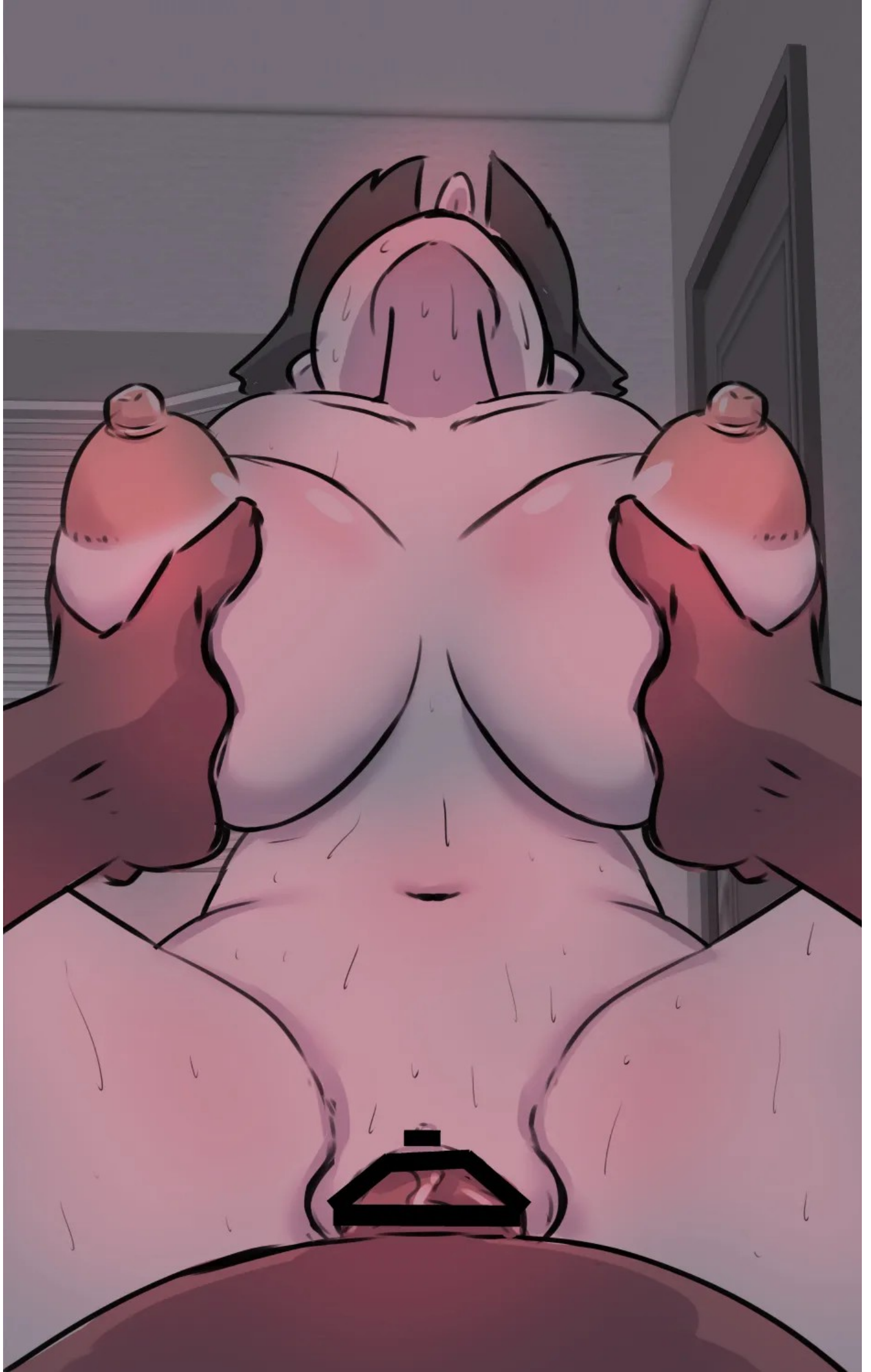
















今日おいつ来る日だよな！

まったく準備がめんどいってたら
ありゃしない…

きの辺の草食わし
ときゃいいか！

…冗談だめー





僕は今、幸せだと思おう

漠然と、きう感じている

仕事は夜勤がたまに入って
大変なことがあるけど、
問題なくこなせている

プライベートもトラブルがない

そしてなにより...



僕の、奥さんの存在

僕と違って気が強くて、
男勝りなところがあるけど、
そこが彼女の良いところだと
思っている

おう、きういえは
もう紅葉のシーズンから

近いうちどっか紅葉狩り
にでも行きたいな



よろお、休憩中から？

何見てんだ？

ぬっ

おはよう

僕の興奮は…
「興奮」というのは今でも気恥ずかしい

なぜなら彼女は子供の頃からの縁、幼馴染だからだ

昔から好きだったのだが、
告白できたのはずいぶんと
後のことだった

告白は成功だった

人生で一番うれしい出来事だった



そして、お互いいろいろで行動を起すはず、
かなり長い交際期間を経て、
ようやく初めてエッチをした

子供の頃、お風呂で見て以来、
始めてみる成長した幼馴染の裸体に
僕は興奮しっぱなしだった



初めてのエッチは、僕にとって気持ち良すぎる出来事だった



興奮しすぎて、すぐに達してしまっただけだった

…今でもすぐに達してしまうのだが

彼女もその時気持ちよかっただろうか？

そうあってほしいと思う



ぼくは彼女が好きだ

だからエッチは優しく、彼女を気遣ってやるものだ

びぽ～ん びぽ～ん
おっ？

おっ来たかっ！

まあ上がったって来てよ



おう、信せ！

今日の飲み会よろしくな！

つまみ色々買って来たぜー！



そして親友の〇〇の存在…

今日は家で飲み会をする
約束だったのだ

僕とこいつとも奥さんは
全員同じ幼なじみだ

奥さんに告白する前には、
よくよくいつに相談して勇気を
もらえ、今でも感謝している

お、来たから、相変わらず
しけたツラだな！

うるせんお前もな

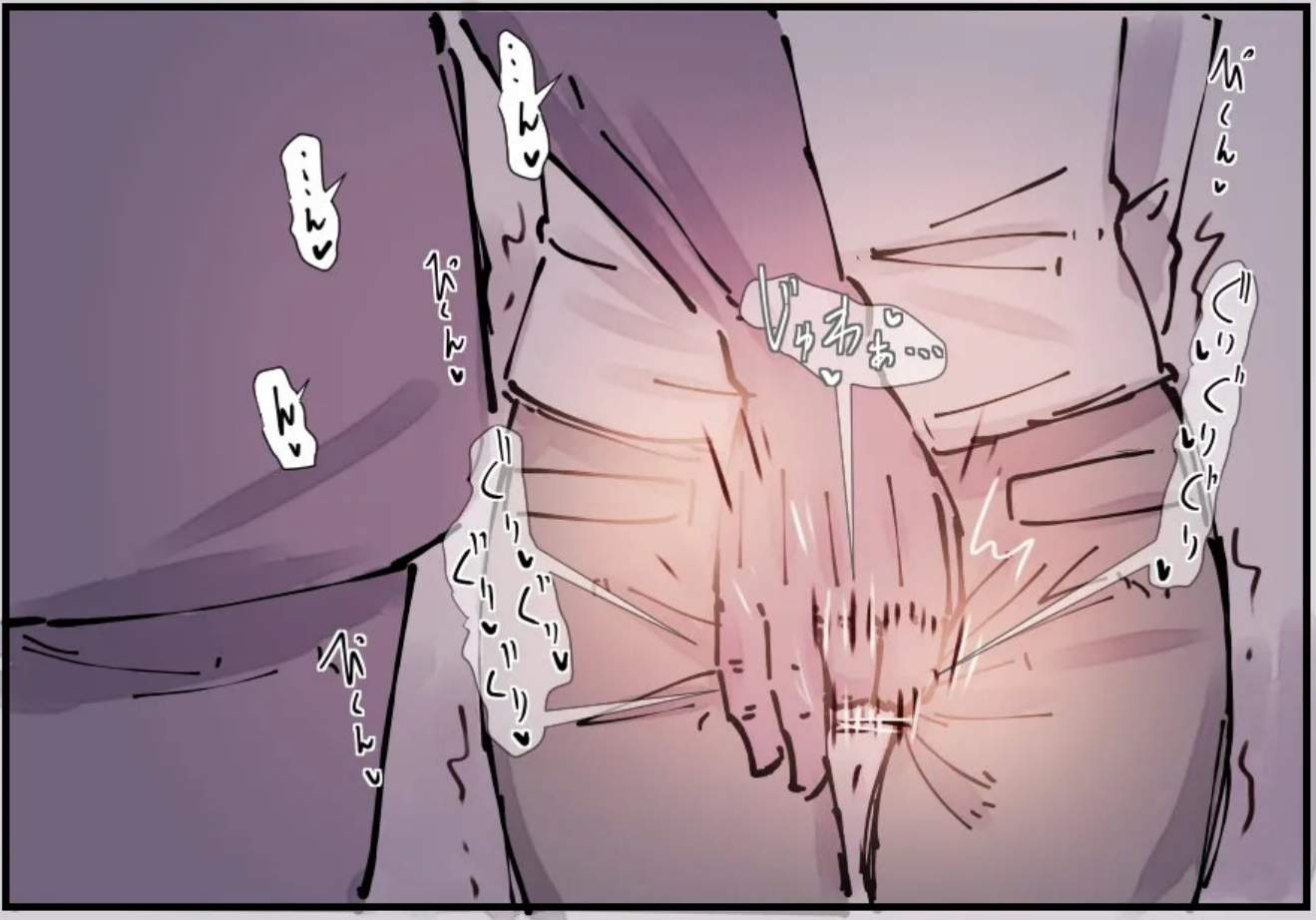
…すまこ
トイレ貸してくれるか？
ちょっと調子悪くて

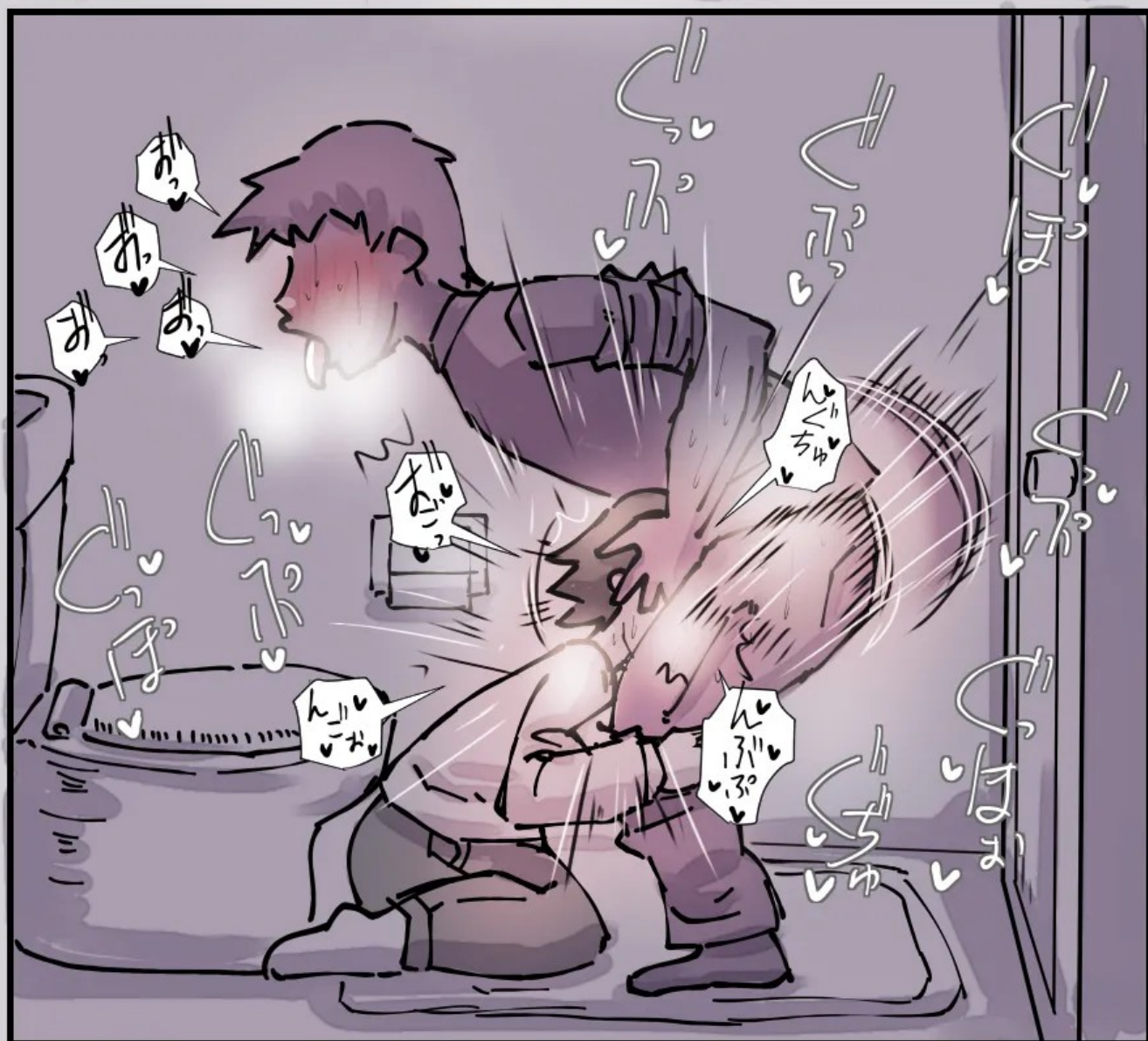
おいおい、うちは公衆トイレか？
まあ仕方ないからいいけど…

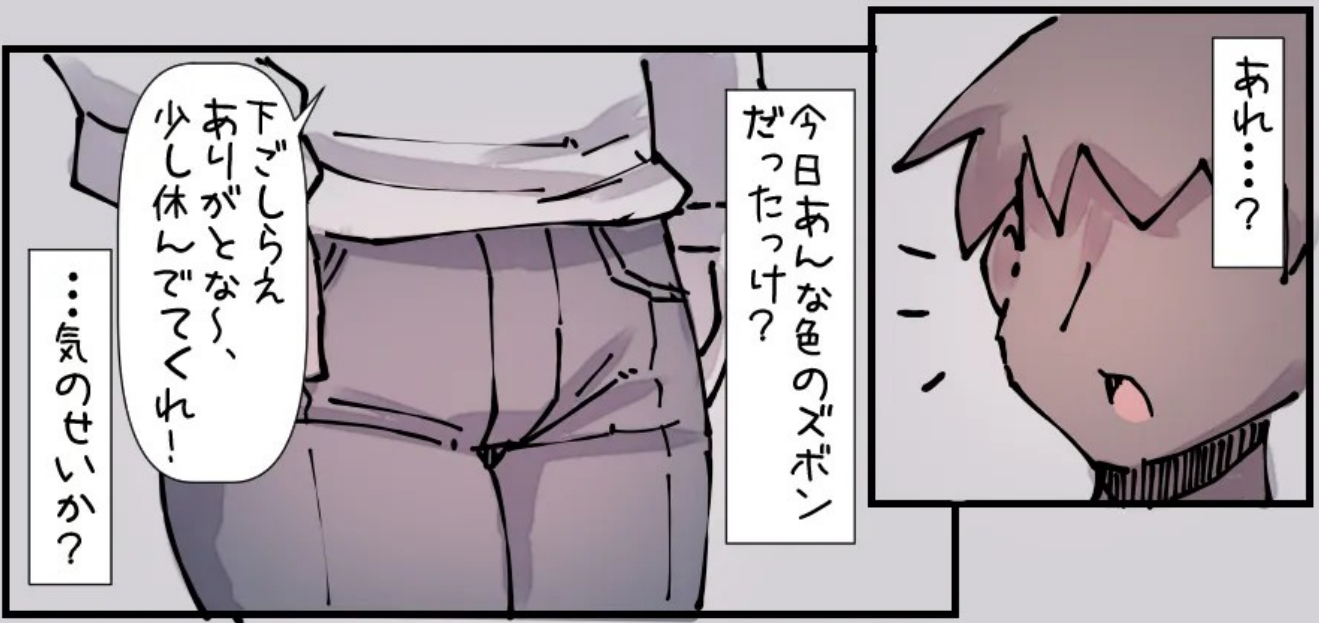
…おっと、
私も管理人さん
とくに用事あるの
思い出したので
下行ってくる

わかったよ、じゃあ僕は
台所で少し準備してるかな

ぬっ









この2人の悪態も昔から変わらないな

喧嘩するほど仲いいと言っけど

僕と奥さんが付き合うことになって

でも今でも変わらず友達としてじゃれついてるし

男女を超えた友情というやつかな...

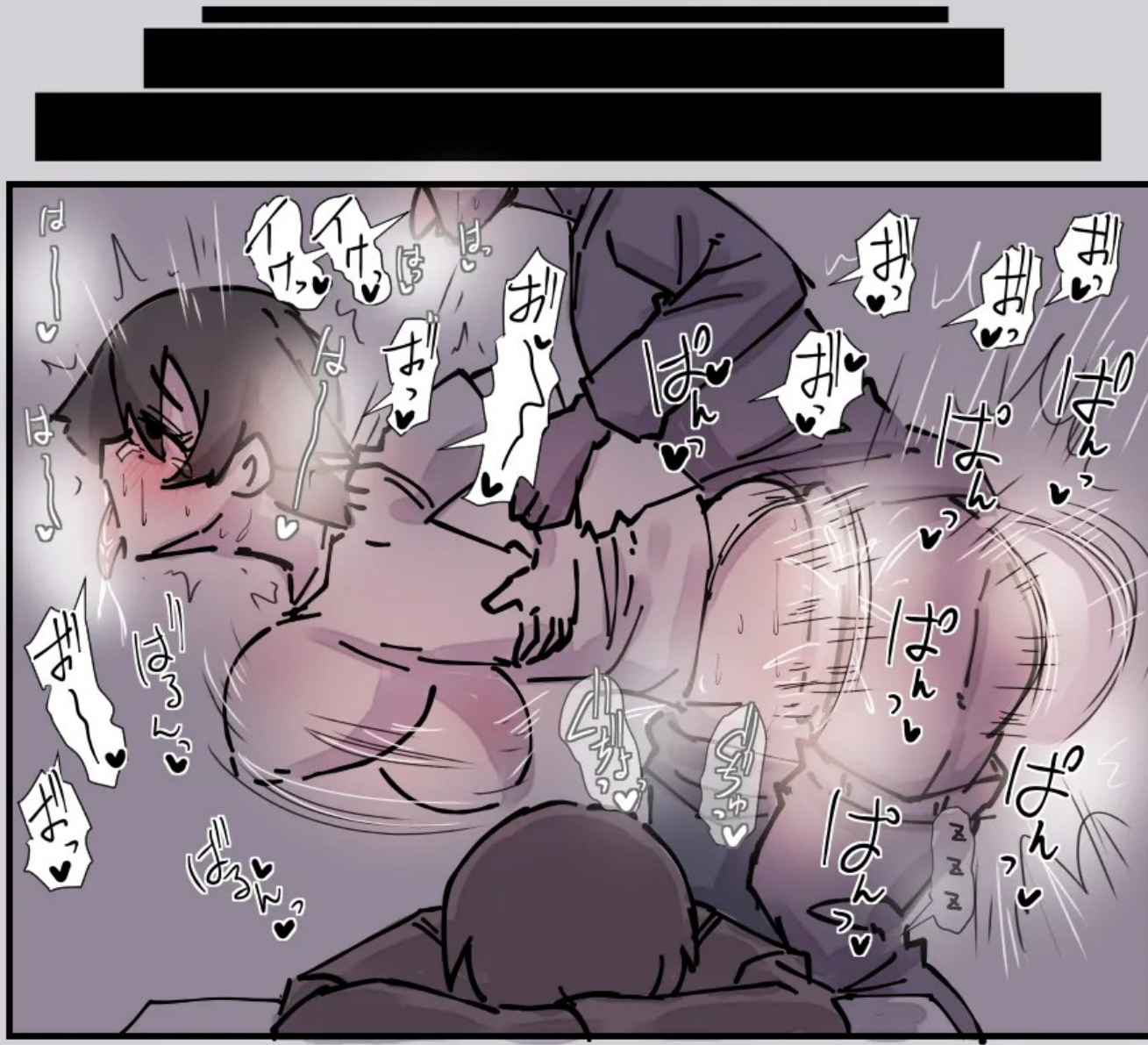


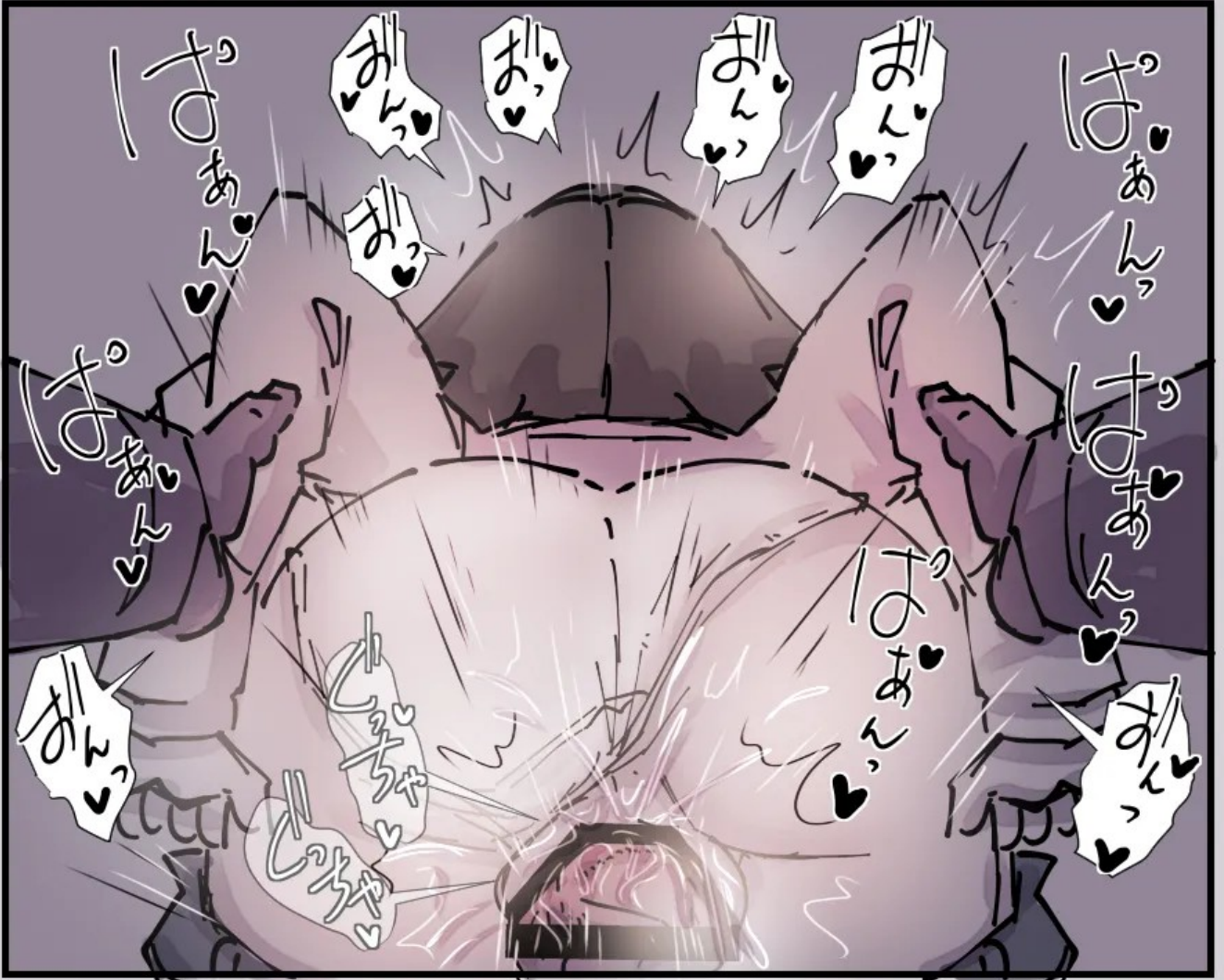
ああ、僕は幸せだ...

呑みすぎて気持ちよくなってきた...

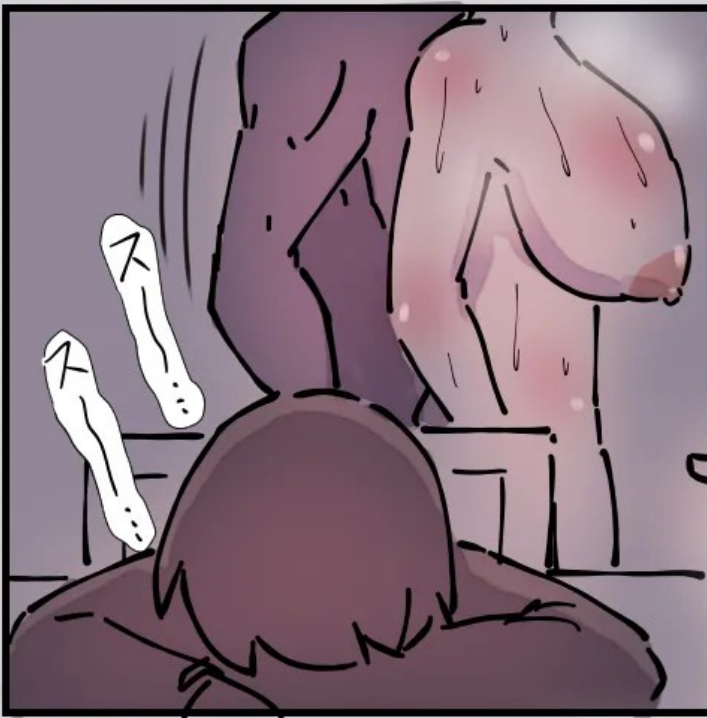
眠いなあ...

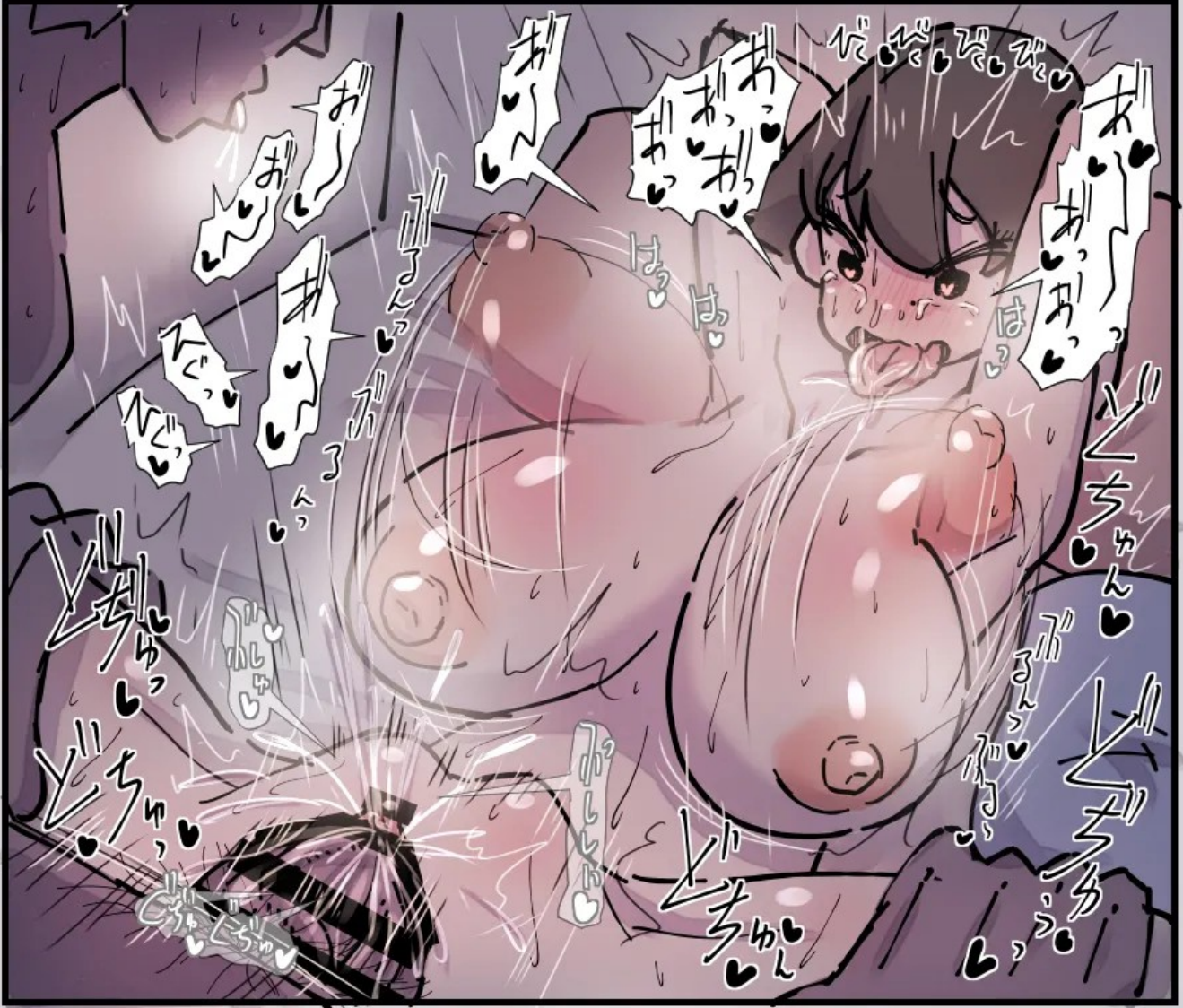
.....

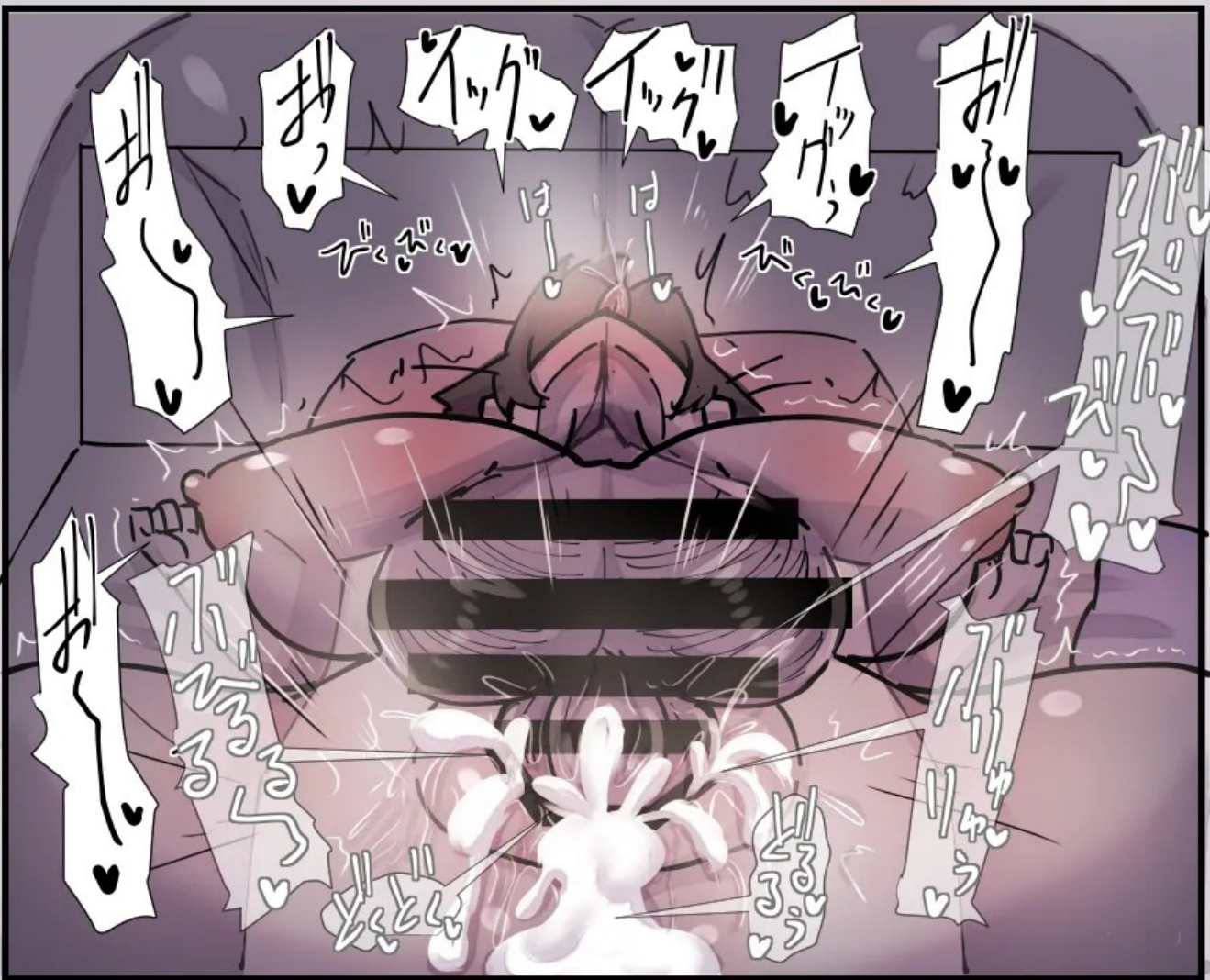














今日おいつ来る日だよなー
ったく準備がめんどくさいから
おしやさないか...

その辺の雄食やし
とまやさいか...

...冗談だよ!



(♡え)え♡
お♡お♡♡

(え)え♡

え(え)え♡

えふっ♡

おほお♡

お♡♡

【各種電子書籍サイトで販売中】
ただの幼馴染で悪友で親友の妻だと思っていた女と
ただれた関係になる話(プラスNTR)

CG集(追加あり)十後日談NTR視点漫画



?人とも
少し遅いなさ



俺の恋人

後輩は



今日も何もかも揃っていい感じ

次の日(休日)

昨日はやりすぎた
しまったのが
いけない...
いやいやな
玄関で寝てきた
のは後輩の方だが...

俺に返って、
今日デートする
約束を取り付け
られたのは後輩だ
エッチもいけど
今日はそれ以外を
楽しもう...

でもなんで後輩は
自分の家集合
指定してたの？
お風呂...
お風呂...
お風呂...
お風呂...

お風呂...
お風呂...
お風呂...
お風呂...

準備は
出来てる？



【各種電子書籍サイトで販売中】

後輩は無口で無表情だけど

ドスケベすぎてぐいぐい来るので大変な話



神張った感じがした

後輩は相変わらず表情を
変えないが、汗をかいて
大満足のようだな



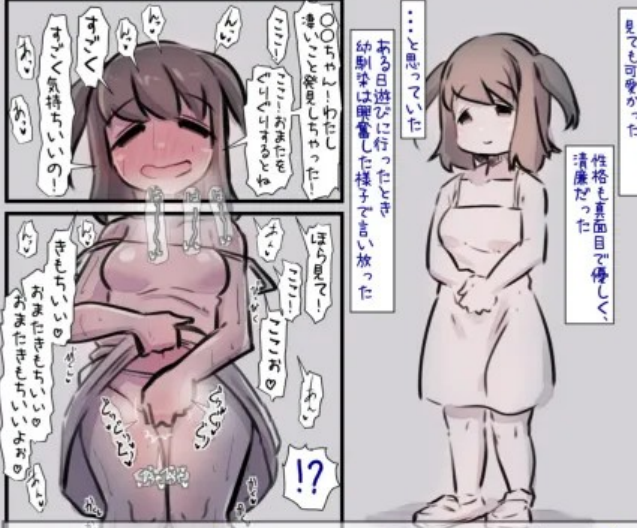
後輩はふいに申し訳なきような顔をした後
ふいにこちらにお尻を向けてふりふりした

自分ばかりに任せてた...
俺があまりに...
申し訳なき...
お尻を向けたら...
お尻を向けたら...
お尻を向けたら...



最初痛く...
全然...
お尻を向けたら...
お尻を向けたら...
お尻を向けたら...

お尻を向けたら...
お尻を向けたら...
お尻を向けたら...
お尻を向けたら...



**【各種電子書籍サイトで販売中】
幼なじみが昔からドスケベで
性欲が強すぎるので解消してあげる話**



子供の頃憧れていたお姉さんに
十数年ぶりに再会したら
全然変わっていなくて
また好きになって告白する話。

U-Non
(ユーノン)



Kindleで配信中 (Unlimited加入者読み放題)
子供の頃憧れていたお姉さんに十数年ぶりに再会したら
全然変わっていなくてまた好きになって告白する話

俺は快楽に返答を出せないでいると、
待ちきれんと言わんばかりに腰を振り始めた。

だめん、だめん

もう我慢できません

動いちゃいます

こっ

あああああ

あああああ

元々腔に入れられただけでギリギリだった俺は、その搾り取るような動きに耐えられない訳もなく...



あれから、何度射精したかわからない。ぐったりとした雪ねんの腔から、溢れた精液が再びぼとぼとと流れ落ちる。

あああああ

あああああ

あああああ

あああああ

嬉しくてん

雪ねんは人形のように軽く、まるでオナホのように抱えて「使える」のだった。

